

21 『駆けぬける風のように』 成井豊

○ジャンル／時代劇

○ストーリー／慶応3年（1867年）10月、徳川慶喜は朝廷に対して大政奉還を申し出た。これを影で画策していたのは、元土佐藩士・坂本龍馬だった。剣術も学問もダメだが、足だけは速い新選組隊士・立川迅助は、沖田総司とともに、竜馬の潜伏場所へ向かう。が、龍馬の中間に見つかり、斬り合いとなる。その最中、沖田が喀血。沖田をかばった迅助は、敵に背中を斬られてしまう。屯所に帰った迅助に対し、土方歳三は切腹を命じる。沖田が自分も切腹すると言うと、土方は十日以内に下手人を斬れば、罪を免じると言う……。

○出演者／男12+女0＝計12

○上演時間／120分

登場人物

立川迅助	（新選組隊士）
沖田総司	（新選組一番隊長）
土方歳三	（新選組副長）
小金井兵庫	（新選組隊士）
三鷹銀太夫	（新選組勘定方）
大月博之進	（新選組砲術師範）
南国塊人	（陸援隊隊士）
安芸岳次郎	（陸援隊隊士）
宿毛嶺八	（陸援隊隊士）
鳥沢鋏平	（陸援隊隊士）

中岡慎太郎  
(陸援隊長)  
坂本龍馬  
(海援隊長)

明治十一年十月一日夕、新聞社の応接室。宿毛嶺八がソファ―に座って、新聞を読んでいる。そこへ、小金井兵庫がやってくる。日誌と書類を持っている。

1

小金井

すみませんね、お待たせして。

宿毛

（立ち上がって）いやいや、こちらこそ、お仕事中にお邪魔して申し訳ありません。（名刺を差し出して）宿毛嶺八と申します。よろしくお願ひします。

小金井

（受け取って）驚いたな。宿毛さんは内務省にお勤めなんですか？

宿毛

ええ、まあ。

小金井

とすると、今日のご訪問の目的は、我が社の偵察ですか。

宿毛

それは違います。いや、隠さずとも結構。ご存じの通り、うちの社員は旗本や御家人ばかり。当然、新政府には批判的です。その上、近頃は、自由民権運動にも肩入れを始めた。お役人の目から見たら、目障りで仕方ないはずだ。

小金井

確かに、省内にはそのような意見を言う者が増えてきています。が、私がここへ来たのは、内務省の役人としてではない。おたくの新聞の一読者として来たのです。

宿毛

つまり、私的な訪問ということですか。どうしてもお尋ねしたいことがあったので。

小金井

いただいたお手紙には、九月三日の号の、ベースボールの記事について聞き  
たいとありました。

宿毛

(新聞を差し出して) この記事です。(読む)「去る九月一日、神奈川県川  
崎の多摩川河川敷で、新橋鉄道局と横浜鉄道局の試合が行われた」

小金井

その記事は私が書きました。ただの観戦記で、政治とは全く関係ありません  
が。

宿毛

私を知りたいには、この記事に出てくる、立川迅助という人物についてです。  
あなたはその人に会ったんですか？

小金井

それはもちろん。  
どんな人でしたか、その人は。歳は。背格好は。横浜鉄道局に勤める前は、  
どこで何をしていたんですか？

小金井

まあ、そんなに慌てないで。あなたの質問にお答えする前に、一つ確かめさ  
せてください。あなたは迅助のことをご存じなんですか？

宿毛

その人が、私の知っている立川迅助であるならば。

小金井

いつ、どこで会ったんです。  
慶應三年。今から十二年前に、京都で。

宿毛

確かに迅助はその頃、京都にいました。新選組の隊士として、町を駆け回っ  
ていました。

宿毛

だったら、間違いない。その人は、私が探していた人です。  
ちよつと待ってください。あなた、ひよつとして、陸援隊の隊士じゃありま

宿毛

せんでしたか？ 名前は確かか……

小金井

名刺を見たでしょう。宿毛さんです。  
そうだ、宿毛さんだ。私を覚えてませんか？ いつも迅助と一緒にいたでし

宿毛

小金井

宿毛

小金井

宿毛

小金井

宿毛

小金井

宿毛

小金井

宿毛

小金井

宿毛

小金井

宿毛

よう。新選組一番隊士、小金井兵庫です。さあ、覚えがありません。

本当ですか？この顔をよく見てください。

小金井さん、私は立川さんに会いたい。会って、話したいことがあるんです。申し訳ありませんが、立川さんに連絡を取っていただけませんか？

宿毛さん、明々後日は暇ですか？

暇ではありませんが、仕事を休むことは可能です。

だったら、一緒に川崎へ行きませんか。実は明々後日、また試合があるんです。私はそれを見に行くことになってまして。迅助のやつに、絶対に来いと脅されたんです。

あの人は気の強い人でしたからね。いざって時はね。しかし、普段はのんびりしてましたよ。

いつも微笑んでましたね。それは自分に自信があったからです。頭がよくて、剣が強くて、私はあの人より男らしい人を見たことがない。

お言葉ですが、あいつはそんな立派な人間じゃない。酒は弱いし、食い意地

は汚いし、女にはからつきしもてなかった。

仲間のくせに、貶すんですか？

事実を言ってるんですよ。あいつはどこにでもいる普通の人間だった。ただ

一つだけ、誰にも負けない特技があって、あいつは――

足が速かった。

そうです。あいつは日本中の誰よりも足が速かった。あいつが走り出したら、誰にも止められなかった。

私も一緒に行っていいですか、ベースボールの試合。

小金井

宿毛

小金井

宿毛

宿毛

宿毛

宿毛が日誌を受け取り、開く。

宿毛

どうぞどうぞ。これ、私が当時書いていた日誌です。(と日誌を差し出して) よかったら、読んでみてください。

いいんですか？ 他人の私が読んで。

構いません。実は今度、この日誌を元にして、連載記事を書こうと思いましたが、いろいろな人に読んでもらって、意見を伺ってるんです。

じゃ、お言葉に甘えて。

(読む)「慶應三年十月十五日。近藤が二条城から戻ってきて、朝廷が幕府の大政奉還を受諾したと言う。二百六十年も続いた徳川の時代が、あっけなく終わりを告げた。隊士たちは口々に將軍・慶喜を罵ったが、近藤は黙したまま。しかし、その顔を見れば、怒りを必死で押し殺しているのがわかる。土方ならば隊士たちの動揺を抑え、新たな道を指し示したに違いない。が、先月の末から、隊士募集のため、江戸へ行ってしまった。新選組はこれからどうなるのか。薩摩や長州はこのまま黙って引き下がるのか。それとも、あくまでも幕府と戦うつもりなのか。徳川の時代が終わっても、徳川家は続く。俺たち新選組は徳川家を支えて、都の治安を守らなければならない。昨日までと同じように、今日も、明日も」

小金井・宿毛が去る。

慶應三年十一月三日朝、新選組屯所。立川迅助・沖田総司がやってくる。二人とも稽古着を着て、木刀を持っている。向かい合って、礼をして、木刀を構える。迅助が打ち込む。沖田がかわす。迅助が再び打ち込む。沖田がかわす。迅助がさらに打ち込む。沖田がかわして、打ち込む。木刀が迅助の顔の手前で止まる。

迅助

もう一本！

二人が木刀を構え直す。迅助が打ち込む。沖田がかわして、打ち込む。木刀が迅助の胸の手前で止まる。

迅助

もう一本！

二人が木刀を構え直す。迅助が打ち込む。沖田がかわして、打ち込む。迅助がかわして、沖田の籠手を打つ。沖田が後ろに飛びのく。

迅助  
沖田

今のは？

浅い。今度はこっちから行きますよ。

沖田が打ち込む。迅助がかわして、打ち込む。沖田がかわして、迅助の木刀を叩き落とし、打ち込む。木刀が迅助の顔の手前で止まる。そこへ、土方歳三がやってくる。

土方

一本、そこまで。

迅助

土方先生、いつ戻ってこられたんですか？

土方

たった今だ。

迅助

近藤先生にはもうお会いになりましたか？ 他の隊士たちには？ みんな、

土方

首を長くして、待ってたんですよ。

迅助

俺がない間、たつぷり羽を伸ばしてたんじゃないのか？

土方

そんなことはありません。沖田さんなんか、毎日、噂をしてたんですよ。土方さんは今頃、どこにいるだろう。痲癩を起こして、喧嘩してなければいい

けどって。

迅助

俺は隊務で出かけたんだ。喧嘩なんかするか。

土方

怒るなら、私じゃなくて、沖田さんを怒ってください。

沖田

総司、おまえ、寝てなくていいのか？

土方

見ればわかるでしょう？ 隊務を休んで、養生させてもらったおかげで、すっかりよくなりました。

沖田

馬鹿を言うな。労咳がそう簡単に治るもんか。

土方

治ったとは言ってます。しかし、こうして動き回っても、もう胸が苦しくなることはない。

迅助

剣術の稽古はいつから始めた。

土方

昨日からです。やっぱり、沖田さんは凄いですよ。木刀を振るのは半年ぶり

迅助

なのに、少しも腕が落ちてませんでした。



土方  
迅助　それはどうかかな。  
どうかかなとは、どういう意味です？

土方が迅助の手から木刀を取る。

土方　総司、今度は俺が相手だ。

迅助　その恰好ですか？　せめて、旅装を解いてからにしては。

土方　一本勝負だ。一汗かく前に終わる。

迅助　しかし、沖田さんはもう十分に汗をかいた後で。

沖田　平気ですよ、立川さん。（土方に）一本勝負ですね？　謹んで、お相手します。

沖田・土方が向かい合って、礼をして、木刀を構える。沖田も土方も動かない。土方がわざと木刀を下げる。沖田は動かない。土方が二、三步動く。沖田は動かない。土方が打ち込む。沖田がかわす。土方が何度も打ち込む。が、沖田はかわすばかり。

土方　どうした、総司。俺を相手に手を抜くつもりか。

土方が強く打ち込む。沖田が受ける。土方が沖田を突き飛ばす。沖田が後ろによろめく。

土方　何をしている。得意の三段突きは錆び付いたのか。

沖田が打ち込む。土方が受ける。激しい打ち合い。一瞬、二人が離れる。次の瞬間、二

人が同時に打ち込む。沖田の木刀が土方の胴の手前で止まる。土方の木刀が沖田の面の手前で止まる。

迅助 胴あり、それまで。

土方 面だろ？

迅助 胴です。

土方 俺の面の方が早くなかったか？

迅助 いいえ、間違はなく、沖田さんの勝ちです。

沖田 (土方に) これでわかってもらえましたか？

土方 確かに腕は落ちてなかった。労咳を患っている男の剣とは、とても思えない。

迅助 土方先生から一本取ったんです。今の都で、沖田さんに勝てるやつは一人も

いませんよ。

沖田 土方さん、私を隊務に復帰させてください。

土方 ムチャを言うな。稽古ならともかく、実戦はまだ無理だ。

沖田 なぜです。今、腕は落ちてなかったと言ったじゃないですか。

土方 一対一なら、おまえに勝てるやつはいない。それは認めよう。しかし、百人

迅助 の敵に囲まれたらどうする。

土方 そういうことはまず起こり得ないと思えますが。

沖田 たとえばの話だ。街へ出たら、何が起こるかわからない。慌てて隊務に復帰

迅助 するより、体に力をつける方が先だ。

沖田 しかし、今の都はいつ戦が始まってもおかしくない。そうでしょう、立川さ

迅助 ん？

大政奉還が決まって以来、通りを歩く侍の姿が増えています。幕府と対立す

沖田

土方

沖田  
土方

迅助  
土方

沖田  
迅助  
土方

迅助

土方

迅助  
土方

る、薩摩や長州の藩士たちです。  
（土方に）やつらは何をやるかわからない。見回りの人間は一人でも多い方がいい。

そのために、俺が江戸まで行って、隊士を集めてきたんじゃないか。心配するな。明日から、巡察の数を増やす。

私もその中に加えてください。

俺は駄目だと言ったはずだ。それにしても、慶喜のやつには腹が立つ。薩長どもがのさばり始めたのは、みんな慶喜のせいだ。

土方先生、呼び捨てはまずいです。

さつき、近藤さんから聞いたんだが、慶喜に大政奉還を献策したのは、土佐の後藤象二郎だそうだが、それは表向きで、実際に策を考え出したのは、別の人物らしい。

私も聞きました。土佐の坂本龍馬という男です。

本当ですか？

おまえもこの名前には聞き覚えがあるようだな。坂本は去年の一月、伏見の旅籠で奉行所の役人を殺して逃げた。今でこそ、偉そうに慶喜に意見しているが、元はただの人殺しなんだ。

しかし、大政奉還が決まったおかげで、幕府と薩長は戦をせずに済んだじゃありませんか。

甘いな。坂本は裏で薩長どもと繋がっている。やつの狙いは幕府を倒すことだ。次に何かしでかす前に、手を打った方がいい。

手を打つとは？  
決まってるだろう。坂本を見つけ出して、斬るんだ。

迅助

それは事を急ぎすぎじゃないですか？　まずは捕まえて、事情を確かめない

土方

と。  
何を生温いことを。人殺しの重罪人に、情けは無用だ。

沖田

しかし、問題は坂本の居場所です。土佐藩邸の中にいたら、手の出しようがない。

土方

しかし、藩邸から出ないわけには行かない。外へ出た時を狙って、一気に片

沖田

をつけてやる。(腹を押さえて、ひざまずく)

土方

どうしたんですか、土方さん？  
腹が減って、死にそうだ。総司、昼飯を付き合え。

土方が去る。

沖田

立川さん、あなたは坂本龍馬と知り合いなんですか？

迅助

なぜそんなことを聞くんです。

沖田

土方さんが坂本の話を始めたら、急に顔つきが変わったんで。坂本を斬るのもいやそうだったし。

迅助

そんなことはありません。幕府に齒向かう者を斬るのが、新選組の仕事ですから。

沖田

だったら、いいんですけど。(胸を押さえて、ひざまずく)

迅助

どうしたんですか、沖田さん？

沖田

私も腹がペコペコです。早く行かないと、土方さんに全部食べられてしま

迅助

ますよ。  
それはまずい。

迅助が走り去る。沖田が立ち上がり、深呼吸をして、去る。

小金井がやってくる。日誌を開く。

小金井

（読む）「慶應三年十一月三日。新選組副長・土方歳三が江戸から帰ってきてた。おかげで、緩んでいた規律がいつぺんに元に戻った。土方を怒らせて、腹を切らされたくはないからだ。土方は直ちに巡察の数を増やし、監察方に土佐藩士・坂本龍馬の居場所を探らせた。坂本は土佐藩邸に潜伏しているものと思われたが、その姿を見た者はいなかった」

十一月四日昼、新選組屯所の庭。三鷹銀太夫・大月博之進がやってくる。二人とも、鉄砲を持っている。

三鷹

小金井

小金井さん、そこで何をしてるんですか？  
別に何も。

三鷹

隠しても無駄ですよ。また本を読んでいたんでしょ？（大月に）この人は三度の飯より本が好きでしょ。暇さえあれば、読んでいる。おかげで友達が一人もいません。

小金井

失敬なことを言わないでください。俺だって、友達ぐらいいる。それにこれは本じゃなくて、日誌です。

三鷹

ああ、日誌。(大月に) この人は毎日、日誌を書いているんです。しかし、人には絶対に見せない。どうせ誰かの悪口でも書いてるんでしょう。だから、友達ができないんです。

小金井

しつこい人だな。俺に用がないなら、放っておいてくれませんか。

三鷹

用があるから、声をかけたんですよ。今日はこれから、お出かけですか？

小金井

ええ。午後から非番なんで、友達と外へ。

三鷹

見栄を張るのはやめてください。誰が好き好んで、あなたなんかと。

そこへ、迅助がやってくる。

迅助

兵庫、待たせて悪かったな。

小金井

(三鷹に) どうです。嘘じゃなかったでしょう？

三鷹

いいえ、立川さんはあなたと同じ一番隊の隊士。つまり、同僚です。きつと

独りぼっちのあなたを憐れんで、遊びに誘ってくれたんですよ。行き先は祇園ですか？ 島原ですか？

迅助

いいえ、桃山診療所です。沖田さんの薬をもらいに行くんです。

三鷹

ああ、診療所。(大月に) この人の叔父上は医者でしてね。娘さんと二人で、

小金井

診療所をやっているんです。沖田さんは以前、そこに通っていたんですよ。それじゃ、俺たちは行きますから。

三鷹

ちよっと待ってください。あなた方、何か大事なことを忘れてませんか？

迅助

外出の届けなら、ちゃんと出しましたけど。

三鷹

(鉄砲を示して) これを見て、何か思い出しませんか？

迅助

鉄砲ですね。それが何か？

三鷹 迅助

今日は鉄砲の調練の日でしょう。どうして来なかったんですか。すみません。すっかり忘れてました。

迅助

一番隊で欠席したのは、沖田さんとあなた方だけです。沖田さんは病気だから仕方ないとして、平隊士のあなた方が欠席するのは許せない。鉄砲の調練だって、立派な隊務ですよ。

三鷹

別に遊んでいたわけじゃないんです。その時間は道場で剣術の稽古をしてました。兵庫もです。

迅助

言い訳はいいから、私についてきなさい。

三鷹

まさか、今からやるんですか？

当たり前です。今日は大月先生が来られて、最初の調練です。何が何でもや

迅助

ってもらいますからね。

三鷹

大月先生というのは？

大月

あれ？ まだ紹介してませんでしたっけ？

三鷹

ええ、まだです。

大月

申し訳ありません。怒りに我を忘れていました。立川さん、小金井さん、こちらは今日から新選組の砲術師範とられた、大月博之進先生。講武所の高島秋帆先生の下で洋式砲術を学ばれた、砲術の専門家です。

迅助

（迅助・小金井に）初めまして、大月です。私は大砲より鉄砲の方が得意なので、鉄砲を使った戦術をご教授させていただきます。

小金井

申し訳ありませんが、続きはまた今度にしてもらえませんか。俺たちは忙しいんで。

迅助

診療所へ行くのは、調練の後でいいじゃないか。

小金井

俺はごめんだ。おまえが行かないなら、俺一人で行く。



大月  
小金井  
大月

三鷹

迅助

三鷹

小金井

三鷹  
小金井

三鷹  
大月  
小金井  
大月

小金井さんでしたよね？ あなたも鉄砲がお嫌いなんですか？  
誰がそんなことを言いました？

言わなくても、態度でわかります。今朝の訓練に出席した人たちも、まるでやる気が感じられなかった。こんなものを撃つ暇があったら、剣を振りたいたい。そう、顔に書いてありました。

新選組の隊士は剣豪揃いですからね。鉄砲なんか必要ないと思ってるんですよ。

そんなことはありません。少人数の戦闘ならともかく、戦となったら、やっぱり鉄砲ですよ。

あなたは剣に自信がないから、素直にそう思えるんですよ。しかし、小金井さんは違うんじゃないですか？

正直に言いますか？ 俺は鉄砲は嫌いじゃない。が、好きでもない。要するに、興味がないんです。

それはなぜです。  
つまらないんですよ、鉄砲は。狙って、構えて、撃つ。ただそれだけ。剣術

で言ったら、上段に構えて面を打つ、その一技だけだ。ちよつと稽古すれば、誰でもできるようになる。

大月先生、あんなことを言わせておいていいんですか？  
小金井さん、あなたは鉄砲というものがまるでわかっていない。

俺が間違っていると云うんですか？

ええ、もう無残なほどに。たとえば、この鉄砲で三間先の西瓜を撃つとしましよう。おそらくあなたの言う通り、ちよつと稽古すれば、誰でも当てられるようになる。じゃ、十間先の栗を撃つとしたら？

三鷹 それはさすがに難しいんじゃないですか？  
大月 私には当てられませんよ。なんなら、今、お見せしましょうか？  
三鷹 しかし、ここには栗がありません。  
大月 小金井さん、親指と人指し指でワツカを作ってください。

大月が小金井から離れた所に立つ。

三鷹 まさか、ワツカの真ん中を撃ち抜くって言うんですか？

迅助 (大月に) やめてください。ちよつとでもずれたら、指が飛ぶ。

大月 失敗したら、私の指を差し上げます。(小金井に) さあ、ワツカを作ってください。

迅助 やめろ、兵庫！

小金井が右手の親指と人指し指でワツカを作る。大月が鉄砲を構えて、撃つ。兵庫が叫び声を挙げながら、右手を押さえる。

迅助 兵庫！

小金井 アツチー！ 弾丸が親指をかすった！

大月 撃った瞬間、ちよつと風が吹いたようです。

小金井 風のせいにするな！

大月 いいですか、小金井さん。私がここまで技を磨くのに、五年かかりました。

鉄砲だって、まじめに取り組めば、それなりにやりがいがあるんです。しかし、ここまで腕が上がると、もう刀は怖くない。なぜだと思えますか？

迅助

大月

三鷹

大月

なぜですか？

あなたが私を斬ろうと近づき始めた瞬間に、あなたを撃ち殺せるからです。

大月先生、お見事でした。(小金井に) それじゃ、調練に行きましょか。

いや、お二人の調練はたった今、終わりました。(迅助・小金井に) どうぞ、外へお出かけください。

小金井が去る。迅助が後を追う。

三鷹

大月

三鷹

大月

小金井のやつ、グーの音も出なくなっていましたね。いい気味です。

つかぬことをお聞きしますが、三鷹さんには友達がいるんですか？

たくさんいますよ。大月先生だって、もう友達ですよね？

私は今日会ったばかりですから。

大月が去る。後を追って、三鷹が去る。

①兵庫がやってくる。日誌を開く。

小金井

（読む）「十一月五日、監察方が坂本の隠れ家を見つけ出した。監察方は以前から、土佐の陸援隊に密偵を潜入させていたのだ。その密偵からの報告によれば、坂本の隠れ家は河原町の材木商・酔屋。この店は以前から、浪人者の出入りが目撃され、薩長どもの潜伏場所の一つと目されていた。坂本は土佐藩邸でなく、この店にいるのかもしれない」

十一月五日夕、新選組屯所の庭。迅助・土方がやってくる。

土方

小金井、立川、支度はできたのか。

小金井

とつくの昔に。いつでも出発できます。

土方

おまえらの役目は偵察だ。もし坂本を見かけても、絶対に手出しするなよ。

迅助

わかっています。

小金井

（土方に）しかし、俺は坂本を見たことがない。どうやって、他のやつと見分けるんです。

迅助

坂本の背丈は五尺八寸、体格は痩せ型、頭は総髪、着物は黒の紋付きに仙台平の袴、足元は外国製の革でできた履物を履いています。

小金井 詳しいな、おまえ。  
土方 馬鹿。今のは全部、手配書に書いてあることだ。  
小金井 革でできた履物とは珍しいですね。そいつを目印にしましょう。

そこへ、沖田がやってくる。

沖田 小金井さん、立川さん、私も一緒に行きますよ。

土方 総司、馬鹿なことを言うな。

沖田 酔屋は河原町にあるんですよね？ だったら、そう遠くない。行って帰って

くるだけなら、大した負担にはなりませんよ。

土方 これはただの散歩じゃない。偵察なんだ。

小金井 ただの偵察で、斬り合いはナシだって言いませんでしたっけ？

土方 人の揚げ足を取るな。おまえらにその気がなくても、向こうが斬りかかって

きたら、相手をせざるを得ない。(沖田に) 今のおまえに、斬り合いは無理

だ。

沖田 心配性だな、土方さんは。小金井さんと立川さんも一緒に行くんです。いざ

って時は、二人に守ってもらいますよ。(迅助・小金井に) さあ、行きまし

よう。

土方 待て、総司！ 俺は行っていいとは言っていないぞ！

② 迅助・沖田が去る。反対側へ、土方が去る。

小金井 (読む) 「不動堂村の屯所を出た俺たちは、河原町の酔屋へ向かった。時刻

は午後十時。人通りは絶え、町は静まりかえっていた。酔屋の表の戸口も既に閉じられ、窓の灯も消えていた」

酔屋の近くの路上。迅助・沖田がやってくる。

迅助 兵庫、こんな時に本なんか読んでないで、ちゃんと見張れよ。

小金井 これは日誌だ。暇だから、今日の分を書いてたんだ。

迅助 そういうことは、仕事が終わってからのしる。

沖田 まあまあ。(小金井に) 何か動きがあったら言いますから、続きを書いてください。

小金井 優しいなあ、沖田さんは。三鷹二号とは大違いだ。

迅助 誰が三鷹二号だ。沖田さん、寒くないですか？

沖田 全然。久しぶりの隊務で、少し興奮しているのかもしれない。

迅助 叔父上から聞きましたけど、労咳っていうのは本当に厄介なんだそうです。ちよつと良くなつたと思つても、すぐにぶり返す。油断は禁物ですよ。

沖田が迅助の口を押さえる。そこへ、宿毛嶺八・鳥沢鋏平がやってくる。

沖田 (小声で) あの二人、酔屋の中から出てきました。

小金井 (小声で) どっちも革の履物は履いてない。坂本じゃありません。

沖田 (小声で) 土佐藩の人間かな。話し声が聞こえれば、判断できるんですが。

迅助 (小声で) ここからじゃ、無理ですよ。

小金井 (小声で) じゃ、俺が聞いてくる。

小金井が宿毛・鳥沢に駆け寄る。

兵庫  
宿毛

助けてくれ。(と跪く)  
どうした。

兵庫

新選組に追われている。しばらく中に匿ってくれ。

鳥沢

おぬし、何者だ。

兵庫

俺は長州藩士・三鷹銀太夫。鳥原で新選組に囲まれて、斬り合いになって、

宿毛

何とかここまで逃げてきたんだ。

兵庫

(遠くを見て)追手の姿は見えないが。  
すぐそこまで来ている。敵は三人だ。見つかったら、殺される。

宿毛

(鳥沢に)どうする？

鳥沢

(兵庫に)長州藩邸はすぐそこだ。今行けば、逃げ込める。

兵庫

これ以上、走れない。中へ入れてくれ。

鳥沢

生憎、今夜は先客がある。悪いが、入れるわけには行かない。

兵庫

誰だ、先客とは。

鳥沢

それはおぬしには関わりのないことだ。新選組が来る前に、ここから立ち去

れ。

兵庫

俺に死ねと言うんだな？ おぬし、名前は。

鳥沢

陸援隊士・鳥沢鋏平。

兵庫

死んだら、化けて出てやる。その時まで達者でいろ。

宿毛

大丈夫か？ 何なら、長州藩邸までついていこう。

兵庫

情けはいらぬ。

鳥沢 宿毛、追手が来たら、まずい。中に入れ。

宿毛・鳥沢が去る。小金井が迅助・沖田に歩み寄る。

沖田 聞こえましたよ。凄い熱演でしたね。

小金井 陸援隊は、土佐の中岡慎太郎が結成した隊です。中岡は、坂本と協力して、

薩長に同盟を結ばせた男。今の男が先客と言ったのは、中岡か坂本のどちらかでしょう。

沖田 私は坂本だと思います。土佐藩邸に姿を見せなかったのは、ここに隠れてい

たからなんだ。

小金井 沖田さん、このまま黙って見過ごす手はありませんよ。

迅助 でも、土方先生は絶対に手出しするなって。

沖田 立川さん、屯所へ行つて、援軍を呼んできてください。

迅助 でも、まだ坂本の姿を確認してないのに。

小金井 坂本は間違いなく、あそこにいる。いいから、早く行ってこい！

迅助が走り出す。沖田は去る。

小金井 (読む)「迅助は屯所へ向かって走り出した。三条通りを西へ百メートル、

河原町通りを南へ千メートル、七条通りを西へ千メートル、堀川通りを南へ三百メートル。走行距離はおよそ二千五百メートル。所要時間はなんと七分ちようど」



新選組屯所。土方がやってくる。

土方

どうした、立川。総司に何かあったのか？

迅助

違います。沖田さんに援軍を呼んできてくれと言われたんです。酔屋に坂本がいるので。

土方

間違いないのか。おまえはその目で坂本の姿を見たのか。

迅助

いいえ、それはまだ。

土方

総司に伝える。そんな不確かな情報で、援軍を送るわけには行かぬ。

迅助

わかりました。

迅助が走り出す。土方は去る。

小金井

（読む）「迅助は今来た道を逆に向かって走った。堀川通りを北へ三百メートル、七条通りを東へ千メートル、河原町通りを北へ千百メートル、三条通りを東へ百メートル。走行距離は同じく二千五百メートル。所要時間は三十秒短縮して、六分半」

酔屋の近くの路上。沖田がやってくる。

沖田

どうでしたか、立川さん？ 援軍は何人来るんですか？

迅助

一人も来ません。土方先生が「そんな不確かな情報で、援軍を送るわけには行かぬ」って。

沖田

それならそれで構わない。私たちだけで踏み込みましょう。

迅助 沖田 迅助  
でも、敵は何人いるか、わからない。三人では危険です。  
沖田 怖いんですか、立川さん？  
迅助 もう一度屯所へ行ってきました。必ず援軍を呼んできますから、それまで待つ  
ていてください。

迅助が走り出す。沖田は去る。

小金井  
（読む）「迅助はまたしても屯所へ向かった。少しでも早く着きたくて、さ  
つきとは違う道を行くことにした。三条通りを東へ千七百メートル、堀川通  
りを南へ千八百メートル、曲がり角は二つ減ったが、走行距離は変わらず、  
二千五百メートル。所要時間はむしろ伸びて、七分ちようど」

新選組屯所。土方がやってくる。

土方 なんだ、立川。また来たのか。  
迅助 沖田さんは三人だけで踏み込むと言っています。私には止められません。で  
すから……。  
土方 俺に来いと言うのか。  
迅助 沖田さんを止められるのは、土方先生だけです。  
土方 総司に伝える。直ちに屯所へ戻れ。俺の命令に背いたら、切腹だ。  
迅助 でも、私がいくら言っても、沖田さんは――  
土方 （迅助の胸ぐらをつかんで）おまえ、新選組に入って、何年になる。総司を  
助けたかったら、死ぬ気で止めろ。（と迅助を突き飛ばす）

迅助が走り出す。土方は去る。

兵庫

（読む）「迅助は走った。四度目の全力疾走で、足がかなり重くなっていたが、速度を緩めるわけにはいかない。自分のいない間に、坂本が姿を現したら、沖田は必ず斬りかかるだろう。一刻も早く酔屋へ戻らなければ。四度目の所要時間は六分ちようど。ついに新記録達成！」

酔屋の近くの路上。沖田がやってくる。

迅助

沖田さん！

沖田

その先は聞かなくても、わかっています。土方さんは、やっぱり駄目だと言ったんでしょう？

迅助

それだけじゃありません。すぐに戻らないと切腹だって。

沖田

参ったな。強引に押し切れれば、何とかなると思ったのに。

迅助

（土下座して）どうか私と一緒に戻ってください。この通りです。

沖田

どうしたんですか。土下座なんかして。

迅助

土方先生に言われたんです。沖田さんを助けたかったら、死ぬ気で止めろつて。

沖田

わかりましたよ、立川さん。もう無理は言いません。

迅助

それじゃ。

沖田

私は土方さんの役に立ちたかった。ただそれだけなんです。土方さんがどう

しても駄目だと言うなら、素直に諦めます。

③そこへ、南国塊人・安芸岳次郎がやってくる。

安芸  
小金井

貴公ら、ここで何をしている。  
俺たちか？俺たちはついさっきまで島原で飲んでいたんだが、ここまで来たところ、こいつが歩けなくなって。(迅助に)おい、三鷹、気分はどうだ。

迅助

急に吐き気がして。でも、もう大丈夫だ。

小金井

嘘をつけ。セリフが棒読みじゃないか。ほら、俺の肩につかまれ。

沖田

(安芸に)それでは御免。

安芸

待たれよ。念のために、いずれのご家中か、お聞かせ願いたい。

小金井

言え、お家の恥になる。すぐそこに藩邸があるとせば、おわかりになると思うが。

安芸

なるほど、長州の方々でござったか。相わかった。気をつけて行かれよ。

そこへ、宿毛・鳥沢がやってくる。

宿毛

(小金井に)あれ？あんた、まだここにいたのか。

安芸

まだとは？

宿毛

ついさっき、ここで会ったんですよ。新選組と斬り合いになって、逃げてき

安芸

たそう。(小金井に)確か、長州の三鷹さんだったよな？

宿毛

何を言う。(迅助を示して)三鷹はこちらのご仁だ。  
いや、(小金井を示して)こっちの人ですよ。間違いない。

小金井

正解を言おう。俺たちはどちらも三鷹。俺たち二人は兄弟なんだ。それでは、先を急ぐので。

南国

小金井

南国

小金井

沖田

南国

南国

その前に一つ聞かせてもらおう。長州人のくせに長州訛りが無いのはなぜだ。俺たちは江戸生まれなんだ。父が若い頃に江戸勤番になって――  
では、もう一つ。吐き気がするほど飲んだのに、酒の匂いがしないのは。  
それは……。  
こうなったら、仕方ない。覚悟を決めましょう。（南国に）私は新選組一番隊長の沖田総司です。実は、この店に土佐の坂本龍馬がいると聞きましたね。もしいるなら、即刻引き渡してください。  
なるほど、新選組の沖田か。ならば、生かして返すわけにはいかぬ。

南国が抜刀し、沖田に斬りかかる。沖田がかわして、抜刀する。それ以外の五人も抜刀する。迅助・沖田・小金井を、南国・安芸・宿毛・鳥沢が囲む。迅助が安芸と、沖田が南国と、小金井が宿毛・鳥沢と斬り合う。小金井が鳥沢の腕を斬る。沖田が咳き込み、ひざまづく。迅助が沖田に駆け寄る。迅助の背中を、南国が斬る。迅助が倒れる。そこへ、坂本龍馬・中岡慎太郎がやってくる。

坂本

安芸

坂本

南国

中岡

待て待て！　こんな夜中に何の騒ぎじゃ。  
こやつらは新選組だ。貴公は中にいる。  
いや、斬り合いはここまでじゃ。双方、刀を引け。  
後から出てきて、勝手なことを言うな。こいつらはおぬしを捕まえに来たんだぞ。  
だからと言って、殺すことはない。

坂本 宿毛 坂本  
迅助 坂本  
中岡 坂本  
坂本  
迅助 坂本  
坂本  
中岡 坂本  
南国 安芸

そうじゃそうじゃ。わしが逃げれば、それで済むことじゃ。  
しかし、鳥沢は腕を斬られたんですよ。

そのかわり、(迅助の背中を示して) こいつも背中を斬られた。(迅助に)  
大丈夫かよ。

ええ、幸い、傷は浅かったようで。(と振り返る)

あつ！ おまん、立川やないかえ！

お久しぶりで、坂本さん。

(坂本に) どういうことだ。その男はあんたの知り合いなのか？

ああ、おまんには前に話をしたろう。新選組の立川迅助じゃ。(迅助に) あ

ん時はいろいろ世話になったのう。けど、次に会う時は必ず殺すと言

たはずじゃ。

覚えています。でも、ただでは殺されませんよ。

(沖田を示して) そちの男は病かよ。

ええ。半年ほど寝込んでいて、ようやく起きられるようになったんですが。

(沖田に) せつかく助かった命を、こんな所で無駄遣いするな。

坂本さん、あんたが素直に捕まってくれば、斬り合いをせずに済んだんだ。

そりああまっこと済まんかったのう。けど、わしにはまだやるべき仕事がある

あるきに、捕まるわけにはいかんがじゃ。中岡、行くぜよ。

(南国たちに) これ以上の騒ぎになったら、人が集まる。直ちに引き揚げま

しょう。

俺は残る。こいつら三人ぐらい、俺だけで十分だ。

(中岡に) 拙者も残る。新選組には長年の恨みがある。生かして返すわけには行かぬ。

中岡 聞こえませんでしたか？ 私は引き揚げようと言ったんです。  
南国 それは俺たちへの命令か。  
中岡 そうです。陸援隊隊長としての命令です。  
南国 だったら、従うしかないな。(安芸に)行くぞ。

坂本・中岡・南国・安芸・宿毛・鳥沢が去る。

迅助 沖田さん、立てますか？

沖田 立川さんこそ、背中の傷は？

小金井 (迅助の背中を見て) 長さ六寸、深さ五分。ただのかすり傷ですよ。(と背中を叩く)

沖田 すみませんでした。いざって時に、役に立たなくて。

小金井 でも、何とか死なずに済んで、よかった。みんな、迅助のおかげです。迅助が坂本の知り合いだったから。(迅助に)なぜ今まで黙ってたんだ。

迅助 何だか言い出しにくくて。(沖田に)申し訳ありませんでした。

迅助・沖田・小金井が去る。

十一月六日朝、新選組屯所。土方・三鷹がやってくる。

三鷹 土方先生、たった今、二番隊の者が戻ってきました。

土方 どうだった、酔屋の様子は。

三鷹 やはり、もぬけの殻のようです。念のために、店の者に確かめたところ、「お武家はんなどいてはらへん。店を始めた三十年前から、お武家はんをお泊めしたことは、一度もあらしまへん」と答えたそうです。

土方 なんだ、その言い種は！

三鷹 怒るなら、私じゃなくて、店の者を怒ってください。

土方 それで、坂本はどこへ逃げたんだ。土佐藩邸か。

三鷹 そのようです。今朝方、見張りの者が、医者が入っていくのを見たそうです。おそらく、昨夜の斬り合いで怪我をした者を治療しに来たんでしょう。

土方 藩邸に逃げ込まれたら、手も足も出せねえな。密偵のやつも、こっちに連絡をよこすのは難しいだろう。

三鷹 しかし、このまま黙って引き下がるわけには行きませんよ。

そこへ、迅助・沖田・小金井がやってくる。



沖田

土方

小金井

三鷹

小金井

三鷹

沖田

土方

沖田

小金井

土方

小金井

三鷹

小金井

三鷹

土方

お呼びですか、土方さん。

近藤さんと相談して、おまえらの処罰を決めた。そこに座れ。

処罰とはどういうことですか。我々は土方先生の命令通り、酔屋から引き揚げ

ようとした。斬り合いになったのは、向こうが仕掛けてきたからで――

それは、あなたの方がうっかりして、敵に見つかったからでしょう。その上、

斬り合いにも負けた。

負けてない。勝負は五分五分だったんだ。でも、そこへ坂本と中岡が来て。

危ういところを見逃してもらったんでしょう？ 違いますか？

三鷹さんの言う通りです。あの時、坂本が敵に加勢していたら、私たちは斬

られていた。

坂本はなぜおまえらを見逃したんだ。

それは……。(と迅助を見る)

やつは仲間にこう言いました。「わざわざ殺すこともない。自分が逃げれば、

それで済むことだ」。

わからねえ。奉行所の役人を撃ち殺した男が、なぜ新選組を助ける。

ひよつとすると、役人を撃つ時も、殺す気はなかったのかもしれない。

捕まりたくなくて、やむを得ず撃つだけで。

信じられない。あなたは坂本の肩を持つんですか？

そうじゃなくて、坂本って男は、俺の想像とは大分違ってたんですよ。薩長

どもを影で操るぐらいたから、さぞかし冷酷な男だろうと思っていいたら、ま

るで田舎の兄ちゃんだった。

そんなやつに助けられて、恥ずかしくないんですか。

落ち着け、三鷹。

三鷹 土方  
三鷹 土方  
三鷹 土方  
沖田 土方  
沖田 土方  
小金井 土方  
小金井 土方  
土方  
小金井 土方  
小金井 土方  
総司 土方  
総司 土方  
土方  
土方  
沖田 土方  
沖田 土方

しかし、土方先生――  
総司、小金井、立川。おまえらが偵察に行つて、敵に見つかったのは、明らかな失敗だ。しかし、そのこと自体は仕方ない。誰にだって、失敗はある。そんな。  
しかし、隊の規律を乱す者は許さない。総司、局中法度を言つてみる。  
「一、士道ニ背キ間敷事」  
おまえは俺の命令を無視して、酔屋へ行つた。さらに、敵と斬り合いになつたにもかかわらず、仕留め切らずに逃がした。これは武士として、許されぬ所業だ。よつて、一月の謹慎を命じる。  
謹慎？  
隊務への復帰は認めない。屯所の中で静かにしている。  
わかりました。  
小金井、おまえも敵を逃がした。  
でも、敵を一人斬りましたよ。  
腕をちよつと斬つただけで、仕留めてないだろう。よつて、総司と同じく、一月の謹慎を命じる。  
わかりましたよ。本でも読んで、のんびりしてます。  
立川、おまえは敵に背中を斬られた。よつて、切腹を命じる。  
切腹？  
土方さん、それはあまりに厳しすぎます。  
何を言う。背中を斬られたら、切腹。前々からの決まりだ。  
しかし、立川さんは敵から逃げようとしたわけじゃない。斬り合いの最中に、つい敵に背中を見せて――

土方

沖田

土方

沖田

迅助

小金井

沖田

三鷹

沖田

土方

三鷹

土方

三鷹

土方

三鷹

土方

三鷹

沖田

土方

斬られた理由はどうでもいい。許せないのは、そのままおめおめと逃げてきたことだ。なぜ自分を斬った敵を仕留めなかった。

それどころではなかったんです。あの時、私が――

立川を庇うのはやめろ。

違うんです。立川さんは私を助けようとして――

いいんです、沖田さん。土方先生の仰る通り、私は士道に背きました。

おまえ、まさか、本気で腹を切るつもりか？

待ってください、立川さん。あなたが腹を切るなら、私も切ります。

馬鹿なことを言わないください。沖田さんの処罰は一月の謹慎ですよ。

立川さんが背中を斬られたのは、私のせいです。それなのに、私は敵を仕留

めなかつた。私も士道に背いたんです。

わかつた。二人まとめて腹を切れ。

本気ですか、土方先生？ 沖田さんは江戸の試衛館にいた頃からの仲間でしょう？ 新選組を結成してからも、たくさんの手柄を立ててきた。新選組に

なくてはならない人です。

俺は例外は認めない。切腹は十日後の明け六つだ。

土方先生。

ただし、それまでに敵を仕留めたら、この件は不問に付す。

それはつまり、腹を切らなくていいってことですか？

（迅助・沖田に）十日なんてあつという間だ。せいぜい気張るがいい。

土方が去る。

三鷹

小金井

三鷹

迅助

三鷹

三鷹

三鷹

三鷹が去る。

迅助

沖田

迅助

小金井

沖田

沖田

沖田

沖田

沖田

沖田

沖田

沖田

なんて人だ。天下の沖田総司に切腹を命じるなんて。

まだ死ぬと決まったわけじゃありませんよ。

たったの十日で、敵が仕留められるわけじゃないでしょう？（立川に）大体、あ

なたは敵の名前も知らないんですよね？

知ってるのは顔だけです。

もう一度、土方先生に掛け合ってくださいませ。切腹は立川さん一人にしてくれつ

て。

沖田さん、死ぬのは私一人でたくさんです。

そういうわけには行きませんよ。あの時、私が発作を起こさなければ、あな

たが背中を斬られることはなかった。

いいえ、隙を作った私が悪いんです。兵庫だったら、楽にかわしていました。

それはどうか。あいつはかなりの遣い手だった。沖田さんだって、結構手

こずってましたよね？

あの人の剣にはためらいがなかった。おそらく何度も人を斬っているはずで

す。

どうする、迅助？

俺だって、腹を切りたくはない。一刻も早く、あいつを見つけ出さないと。

しかし、どうやって探す。あいつは今、土佐藩邸に潜伏している。俺たちに

は手が出せない。

陸援隊には密偵が一人、潜入しています。その人に協力してもらえば。

小金井  
迅助

でも、名前もわからないのに、どうやって？  
とりあえず、土佐藩邸に張り込んでみる。待ってれば、そのうち顔を出すだろう。

沖田  
迅助

立川さん、一つ聞いてもいいですか？

沖田  
迅助

何ですか？

沖田  
迅助

あなたはいつ坂本と知り合いになったんです。なぜ今まで隠してたんです。

沖田  
迅助

隠すつもりはなかったんです。でも、どうやって説明すればいいか、わからなくて。初めて会ったのは、去年の一月でした。それから、十二月にまた会

沖田  
迅助

って、その時、命を助けられたんです。

沖田  
迅助

あなたが坂本に？

沖田  
迅助

役人殺しの重罪人に助けられた。だから、言えなかったのか。

沖田  
迅助

そうじゃないんだ。おまえ、さっき言ってただろう。さぞかし冷酷な男だろ

沖田  
迅助

うと思っただら、まるで田舎の兄ちゃんだったって。俺も同じことを感じ

沖田  
迅助

たんだ。この人は、絶対に悪い人じゃないって。

沖田  
迅助

坂本は幕府を倒そうとしてるんですよ。

沖田  
迅助

その通りです。でも、坂本さんはこう言ってたんです。人が死ぬのを見るの

沖田  
迅助

はもういやだって。

沖田  
迅助

本当か？

沖田  
迅助

笑われるかもしれませんが、私は坂本さんが好きになっただんです。新選組の

沖田  
迅助

敵なのに。

迅助・沖田・小金井が去る。

十一月六日夜、土佐藩邸。宿毛嶺八・鳥沢鋏平がやってくる。鳥沢は酒瓶と茶碗を持っている。

宿毛

鳥沢さん、酒はやめた方がいい。傷に障る。

鳥沢

偉そうな口を叩くな。誰のおかげで、怪我をしたと思ってるんだ。

鳥沢

それは何度も詫びたじゃないか。

宿毛

俺はあなたの身代わりになった。一歩間違えれば、この腕を失うところだったんだ。申し訳ないと思うなら、酌ぐらいしてくれてもいいんじゃないか？

鳥沢

わかった。(酒瓶を取って)でも、一杯だけだぞ。(と酒を注ぐ)

宿毛

あんた、斬り合いは初めてだったんだらう？

鳥沢

実はそうだ。剣術にはそれなりに自信があつたんだが、やはり実戦は違う。相手の剣をかわずのに精一杯で、どうしても斬り込めなかった。

宿毛

小便はチビらなかつたか？

鳥沢

馬鹿なことを聞くな。

宿毛

隠すな隠すな。俺も初めての時大量にチビった。実は昨夜も少し。だから、こうして水分を補給しているというわけだ。もう一杯。(と茶碗を差し出す)

あと一杯だけだぞ。(と酒を注ぐ)

そこへ、坂本龍馬・中岡慎太郎がやってくる。

坂本　お、ええもんを飲みゆうやいか。わしも一杯、ええかえ。

鳥沢　どうぞ。(と茶碗を差し出す)

中岡　鳥沢さん、怪我の具合はどうです。

鳥沢　医者は、骨にも筋にも異状はないと言っていました。一月もすれば、元通りに動くようになるそうです。

中岡　それはよかった。鉄砲の調練はしばらく休んで、治療に専念してください。

鳥沢　しかし、じっとしてても、体が鈍る。使いつ走りならできますから、何でも

言いつけてください。

中岡　よろしゅう頼むぜよ。もう一杯、かまんかのう？(と茶碗を差し出す)

坂本　どうぞどうぞ。(と酒を注ぐとうとする)

鳥沢　(宿毛の手をつかんで)坂本さん、私はあなたに言いたいことがあります。

坂本　わかちゅう。一杯だけにせえ言うがやる。

鳥沢　酒の話じゃない、昨夜の斬り合いだ。なぜあの三人を見逃したんです。私は

腕を斬られたんですよ。

坂本　あのまま続けたら、もっと斬られちよったかもしれん。

鳥沢　馬鹿な。あんたと中岡さんが来て、こっちは六人。間違いなく勝ってました

よ。

坂本　(宿毛の手から酒瓶を取って)そんなにあいつらを殺したかったがかえ。(

と酒を注ぐ)

鳥沢　新選組を殺して、何が悪いんです。

中岡　鳥沢さん、坂本さんが去年の一月に怪我をしたことは知ってますか？

鳥沢  
中岡

宿毛  
坂本

中岡  
鳥沢  
坂本

宿毛

中岡  
宿毛  
中岡

鳥沢  
坂本

いいえ。

伏見の寺田屋にいた時、奉行所の役人に襲われたんです。坂本さんはピストルで応戦したが、左手の指をぎっくり斬られた。何とか外に逃げたものの、薩摩藩邸に辿り着く前に動けなくなつた。そこへ、あの立川という男が通りかかつたんです。

南国さんに背中を斬られた男ですか？

あいつは傷の手当てをしてくれた。おまけに、医者までおぶつていくと言うた。それはさすがに断つたがのう。

（鳥沢に）坂本さんにとつては、命の恩人と言つてもいい人なんですよ。

新選組だつて、人間だ。困っている人がいたら、助けることもあるでしょう。

鳥沢さん、おまん、今、ええことを言うたのう。新選組やち、人間ぜよ。立

川に助けられた時、わしもそう思うたんじゃ。確かに、頭の中身はわしらと

は違う。いまだに幕府を崇め奉つちよる、愚か者じゃ。ほうやけんど、それ

以外はなんぼも変わらんぜよ。この国を何とかしたいと思うちよる、日本人

なんじゃ。日本人か。改めて聞くと、いい言葉ですな。

宿毛さん、坂本さんの話はあまり真に受けられない方がいい。

なぜですか？

ただの理想論に過ぎないからですよ。今の日本を見回してください。これが一つの国と言えますか？幕府と薩長、真つ二つに分かれている。我々陸援

隊が成すべき仕事は、これを一つにすることなんです。

その通り。一刻も早く薩長と兵を挙げ、幕府を倒すべきだ。

待て待て。そこでわしが考えたが、この新政府綱領八策ながじゃ。（と懐



宿毛  
坂本

宿毛

から紙を取り出して広げる)  
(読む)「新政府綱領八策、第一義、天下有名の人材を招致し顧問に備ふ」。身分所属にかかわらず、優れた人材を登用すべきである。ちゆう意味よ。新政府には、幕府からも薩長からも人材を集める。ほいたら、戦らあせんでも済むきにああ。(と酒瓶を振って) 酒が切れた。すまんけど、もう一本、持ってきてくれんかのう。  
お安いご用です。

宿毛が酒瓶を持って、奥へ向かう。そこへ、南国塊人・安芸岳次郎がやってくる。

安芸  
宿毛

宿毛殿、貴公に話がある。  
私にですか？

安芸  
坂本

他の方々も聞いていただききたい。重大な話だ。  
ちようどよかった。わしもおまんらに話があつたがじゃ。ちくと、これを見  
てくれんか。(と紙を差し出す)

安芸

それはまた後で。話というのは、昨夜のことでござる。坂本殿は先月から富  
山へ行つておられた。京へ戻つてきたのは十一日ぶり。そこへ突然、新選組  
が現れた。妙だとは思わんか？

宿毛

別に妙ではないでしょう。新選組のやつらは、坂本さんが帰ってくるのを待  
ち構えていたんだ。

安芸

いずこで。

宿毛

それはもちろん、酔屋の近くですよ。

安芸

それはありえぬ。坂本殿が酔屋を隠れ家に使っていることは、新選組は知ら

中岡

安芸

南国

宿毛

南国

宿毛

南国

宿毛

南国

宿毛

南国

宿毛

鳥沢

安芸

ぬはず。我々でさえ、昨日初めて知ったのだから。つまり、あなたはこう言いたいんですか。陸援隊の中に、新選組の密偵がいると。

中岡殿から、坂本殿の警護を命ぜられたのは、昨日の暮六つ頃。その時、その場にいたのは、拙者、南国殿、鳥沢殿、宿毛殿の四名でござった。宿毛、おまえは斬り合いの時、敵を斬るのをためらったな？

そんなことはありません。

ならば、なぜ鳥沢は腕を斬られた。おまえを庇うためではなかったのか。

それはあなたの言う通りです。でも、私は実戦が初めてで、思うように刀が振れなくて。

仲間を斬るのがいやで、わざと振らなかったのではないか？

違う。私は密偵ではない。

拙者も南国殿も鳥沢殿も、陸援隊に入隊したのは結成時の六月。しかし、宿

毛殿は三月遅れの九月でござったな？

宿毛、素直に白状しろ。(と刀の柄に手をかける)

(抜刀して) 寄るな！

中岡、宿毛は藩邸内で刀を抜いた。成敗しても構わんな？(と抜刀する)

冗談じゃない。斬り合いなんかしたら、陸援隊全員がここから追い出される。

二人とも、刀を納めてください。

中岡さん、私は密偵ではない。信じてください。

(中岡に) 私は宿毛と一緒に行動していた。新選組と接触していないことは、私が保証します。

直接会わずとも、密告はできる。手紙でも、言伝でも。

鳥沢

宿毛は密告なんかしてない。そんなことができるほど、器用な男じゃないんだ。

南国

鳥沢、余計な庇い立てすると、おまえも死ぬことになるぞ。

坂本

(笑う)

南国

何がおかしい。

坂本

話があると言いき、黙って聞きよったけど、結局、最後は斬り合いだよ。

南国

まるで子供の喧嘩じゃのう。

坂本

俺を侮辱するつもりか。

安芸

刀で物事を解決する時代は終わったがじゃ。どういてそれがわからん。

坂本

宿毛が密偵だとしたら、貴公はまたすぐに狙われる。これは貴公のためにして

坂本

ていることなのだ。

坂本

わしのためじゃと？ 笑わせるな。ほれやったら、わしは陸援隊と縁を切る、

中岡

もうここへは来ん。

坂本

待ってくれ、坂本さん。

中岡

わしは昨日、日が暮れる前に、酔屋に着いた。通りを歩きよった姿を、誰かに

中岡

見られたがかもしれん。わしは後ろらあ気にせんき、楽に尾行できたがじ

中岡

やろう。新選組に報せたがは、その誰かながじゃ。

中岡

確かに、それもありうるな。とすれば、密偵などいかなかったということにな

南国

る。どうです、南国さん？

中岡

俺は偶然は信じゃない。

南国

しかし、その偶然が起きなかつたとは言い切れない。違いますか？

南国

いいだろう。動かぬ証拠を手に入れるまで、宿毛の命はおまえに預ける。

南国・安芸が去る。

坂本

宿毛さん、ええ加減、刀を納めたらどうじゃ。

宿毛

すみませんでした。ご迷惑をおかけして。(と納刀する)

坂本

中岡、わしはやつぱりよそへ移るぜよ。ここは酒も自由に飲めんし、外にも

中岡

出れん。息苦しゅうて、かなわんがじゃ。

鳥沢

おまけに、血の気の多い連中もいるしな。

坂本

でも、さっきの話の続きはどうなるんです。新政府綱領八策でしたっけ？

中岡

それはまた今度じゃ。中岡、行くぜよ。

宿毛

表から出たら、見張りがいるかもしれない。庭へ出て、塀を乗り越えよう。

坂本

行き先はどちらです。密偵に言うわけにはいかんのう。(笑って) 冗談じゃ。

坂本・中岡が去る。宿毛・鳥沢も去る。

①十一月十一日朝、新選組屯所。三鷹がやってくる。日誌を開く。

三鷹

（読む）「十一月十日、迅助と沖田が切腹を命じられて、五日が過ぎた。二人は毎日、土佐藩邸を見張っているが、敵は姿を現さない。残りは五日。迅助は最後まで諦めないと言っているが、日に日に顔色が悪くなってきた。沖田の体調も心配だ。それにしても、土方の馬鹿には腹が立つ。今夜あたり、厠の糞壺に突き落としてやろうか」

そこへ、大月がやってくる。

大月

三鷹さん、それは小金井さんの日誌じゃありませんか？

ええ、私の悪口が書いてないかどうか、確かめようと思いましたが。あいつの部屋から持ってきたんです。

黙ってですか？ それはちよつとまずいんじゃないや。

すぐに戻せば、バレませんよ。しかし、これほどひどいことが書かれているとは思いませんでした。土方先生を馬鹿呼ばわりしています。

三鷹さんのことは？

それがなぜか、一度も出てこないんです。ひよつとすると、私のことは憎か

大月  
三鷹

大月  
らず思っているのかも。  
いや、単に眼中にないだけかもしれないよ。

そこへ、小金井がやってくる。

小金井  
三鷹さん、それは俺の日記ですよ？

三鷹  
厠の前に落ちてたんです。今、持っていこうと思ってたんですよ。

小金井  
おかしいな。確かに自分の部屋に置いておいたはずなのに。

三鷹  
私が勝手に持ち出したって言うんですか？

小金井  
この前も、迅助が買ってきた麩饅頭、勝手に食いましたよね？

三鷹  
あれはあなたも一緒に食べたじゃないですか。そんなことより、私はこの日誌の中に、恐ろしい記述を発見してしまいました。土方先生の暗殺計画です。

大月  
本当ですか？

三鷹  
ほら、ここを見てください。(読む)「今夜あたり、厠の糞壺に突き落とすてやろうか」。

小金井  
返せ！(と三鷹の手から日記を奪い取る)

三鷹  
どうせやるなら、もつと武士らしいやり方にしたらどうです。

大月  
暗殺は止めないんですか？

そこへ、迅助・沖田がやってくる。

迅助  
大月先生、申し訳ありません。今日の調練も休ませていただきます。

大月  
わかってますよ。土佐藩邸へ行くんでしょう？

三鷹

（沖田に）見張りは立川さんに任せたらいかがですか？ たまには体を休めないで。

沖田

交替で休みを取っていますから、ご心配なく。

大月

失礼ですが、沖田さんは労咳なんですよ？ だったら、刀を振り回すのは辛いはずだ。土方先生に頼んで、ピストルを買ってもらったらいかがです。

小金井

沖田さんにピストルは必要ありませんよ。この人の剣は弾丸よりも速い。お言葉ですが、弾丸より速い剣などありえません。（沖田に）どうか、もし

沖田

もの時のために。少し考えさせてください。立川さん、行きましよう。

迅助・沖田が去る。小金井が日誌に書き始める。

三鷹

また何か書き始めましたね？ 今度は誰の悪口ですか？

小金井

少なくとも、あなたのじゃありませんよ。

三鷹

そう言えば、その日誌にはなぜ私が出てこないんですか？ あなた、実は私

小金井

あなたの分は別冊に書くんです。その別冊を見せなさい。今すぐにです。

三鷹

②三鷹・大月が去る。

小金井

（読む）「十一月十一日、迅助と沖田は今日も朝から土佐藩邸を見張った。が、相変わらず、敵は姿を現さない。今日も駄目かと諦めたかけた夕方、見

覚えのある顔が二つ、中から出てきた」

十一月十一日夕、土佐藩邸近くの路上。宿毛・鳥沢がやってくる。後を追って、迅助・沖田がやってくる。宿毛・鳥沢が去る。

迅助 沖田さん、覚えてますか？ 右側の男は、兵庫が腕を斬った男です。

沖田 確か鳥沢という名前でしたね。

迅助 どうします？ 捕まえて、屯所へ連れていきますか？

沖田 いや、あの人たちの行き先に、我々の探している男がいるかもしれない。とりあえず、後を追いかけてみましょう。

迅助・沖田が去る。

小金井

（読む）「鳥沢たちは木屋町通りを北へ向かった。どうやら先を急いでいるようで、一度も後ろを振り返らなかつた。ところが、二条通りとの十字路に来たところで、鳥沢が右へ、もう一人の男が左へ曲がった」

宿毛・鳥沢がやってくる。後を追って、迅助・沖田がやってくる。宿毛・鳥沢が二手に分かれて、去る。

迅助 どうします？ 我々も二手に分かれますか？

沖田 そうするしかないでしょうね。私は鳥沢の後を追います。

迅助 じゃ、私はもう一人の方を。沖田さん、体が辛くなったら、尾行はやめて、



沖田 屯所へ戻ってください。  
心配しないで。今日は調子がいいんです。

迅助・沖田が二手に分かれて、去る。

小金井

（読む）「男は二条通りを西へ向かい、河原町通りとの十字路で右折。つまり、今度は北へ向かった。相変わらず、後ろを振り返らない。ところが、丸太町通りとの十字路に来たところで」

宿毛がやってくる。後を追って、迅助がやってくる。そこへ、土方がやってくる。

土方

立川、ここで何をしている。

立川

隊務です。詳しい話はまた後で。

土方

待てよ。総司はどうした。一緒じゃないのか。

立川

ついさっきまで一緒だったんですが、別行動を取ることにしたんです。

土方

あいつを一人にしたのか？ 体の具合は大丈夫なんだろうな？

宿毛が去る。

立川

あれ？ いない。

土方

何を言ってる。俺はここにいるぞ。

立川

そうじゃなくて、たった今まで尾行していた男がいなくなっただんです。

土方

尾行だと？ 一体誰を尾行してたんだ。まさか、坂本か？

立川

ああ、もう！ 土方先生の馬鹿！

迅助が走り出す。土方は去る。

小金井

（読む）「迅助は男を追いかけて、丸太町通りを西へ向かった。堀川通りとの十字路まで走ったが、男の姿はない」

迅助

（立ち止まって）しまった。東だったのか。（走り出す）

小金井

（読む）「すぐに回れ右をして、今度は東へ。白川通りとの十字路まで走ったが、やはり男の姿はない」

迅助

（立ち止まって）しまった。北だったのか。（走り出す）

小金井

（読む）「また回れ右をして、今度は西へ。男を見失った、河原町通りとの十字路まで戻ると、今度は南へ」

迅助

（立ち止まって）違う違う。こっちは南だ。（走り出す）

小金井

（読む）「また回れ右をして、今度は北へ。葵橋で加茂川を渡って、下鴨神社まで来たところで、遠くに男の後ろ姿が見えた」

迅助

（立ち止まって）いた！ やつと見つけた！

小金井

（読む）「走行距離はおよそ一万メートル。所要時間は二十五分。しかし、土方にさえ会っていないければ、走る必要はなかった」

迅助が去る。

小金井

（読む）「男は北山通りを東へ向かい、高野川の手前で今度は北へ向かった。辿り着いたのは、京都の北の岩倉村。そこには、かつて孝明天皇の近習を務

めていた公卿・岩倉具視の家があった」

小金井が去る。

③ 岩倉宅近くの路上。坂本・中岡がやってくる。そこへ、宿毛がやってくる。

宿毛 坂本さん。

中岡 宿毛さん、どうしてここへ？

宿毛 坂本さんに用があつて。岩倉様とのお話はもう終わつたんですか？

中岡 たつた今。すれ違いにならなくて、よかつた。

坂本 (宿毛に) で、わしに用とは何じゃ。

宿毛 参政の後藤さんが、至急、藩邸に来てくれと。新政府の件で、話したいそ

うです。

坂本 それから。

宿毛 それだけですけど、何か。

坂本 ほれやつたら、そこに隠れちよる男は何じゃ。おい、出てこんがか！

そこへ、迅助がやってくる。

中岡 坂本さん、あいつはこの前、酔屋に来た男じゃないか？

坂本 新選組の立川迅助じゃ。

中岡 宿毛さん、あなたが連れてきたんですか？

宿毛 違う。私は何も知らなかつた。

迅助 (中岡に) その人を責めないでください。私が勝手に後をつけてきたんです。

坂本

どうせまたわしを斬りに来たんじやろう。おまんちゆう男はまつこと恩知らずじやのう。この前、命拾いをしたがは、誰のおかげじやちゆうがじや。

迅助

そのことについては、感謝しています。この通りです。（と頭を下げる）

中岡

驚いたな。新選組が頭を下げた。こういうやつなんじや、立川うちゆう男は。（迅助に）けんど、礼を言うた

坂本

め、ここに来たわけじやあないろう？

迅助

私は、私の背中を斬った男を探しています。

坂本

こうやって立って、歩けるがじや。大した傷じやなかつたろうが。

迅助

おかげさまで。しかし、新選組には決まりがあります。背中を斬られた者は

坂本

切腹しなければならいんです。

中岡

何じやそりや。何ともおかしな決まりじやのう。

迅助

（迅助に）しかし、あんたはまだ生きています。それはなぜだ。

宿毛

土方先生が十日の猶予をくれたんです。十日以内に敵を斬れば、切腹は免じ

宿毛

ると。

迅助

それで私をつけてきたのか。残念だったな。あんたが探している敵は、ここ

宿毛

にはいない。

宿毛

じや、どこにいます。

迅助

言うわけないだろう。

坂本

じや、せめて、名前を教えてください。苗字だけでも。

迅助

やめんか、立川。自分が今、どればあ下らんことをしゆうか、おまんにはわ

迅助

からんか。

迅助

そうですね。私はあなた方に、味方を売れと言ってるんだ。わかりました。

中岡　もうやめます。（と刀の柄に手をかける）  
で、今度は力づくで聞き出すというわけか？　しかし、あんたは一人、こち

迅助　らは三人だぞ。

坂本　他に方法がありませんから。（と抜刀する）

迅助　死にたいがか。

坂本　敵が見つけられなければ、切腹です。同じことです。

迅助　馬鹿馬鹿しいとは思わんのか。おまんが敵を斬ろうが、切腹しようが、世の中は何ちゃあ変わりやあせん。命が一つ、消えるだけやき。

迅助　それは違います。私が敵を見つけられなければ、私と沖田さんの、二つの命

坂本　が消える。

迅助　ほいたら、新選組なんぞ辞めてしまえ。

坂本　それはできません。

坂本　坂本が抜刀し、迅助に斬りかかる。激しい斬り合い。坂本が迅助の腹を峰打ちする。迅助が倒れる。

宿毛　坂本さん！

坂本　安心せえ、峰打ちじゃ。（迅助に）新選組の立川迅助はたった今、死んだ。

迅助　おまんは今から別の人生を生きるがじゃ。

坂本　別の人生？

迅助　わしの仲間になれ。わしと一緒に新政府を作るがじゃ。幕府と薩長が一つにな

坂本　なったら、もう誰ちゃあ死んで済むきに。

迅助　駄目です。私だけ逃げるわけには行きません。

坂本　　そう言わんと、もういっぺん、じっくり考えてみいや。気が変わったら、土佐藩邸へ来い。おまんのことは後藤に話しちよくきに。中岡、行くぜよ。  
宿毛　こいつは置いていくんですか？  
坂本　しばらくは動けんやろう。つけられる心配はない。  
中岡　優しいな、坂本さんは。

坂本・中岡・宿毛が去る。そこへ、小金井がやってくる。

小金井

（読む）「坂本の言う通り、迅助はすぐには動けなかった。何とか立ち上がる事ができたのは、坂本たちが去ってから、一時間も後だった。迅助は腹の痛みに耐えながら、新選組の屯所まで歩いて帰った。歩行距離はおよそ一万二千メートル。所要時間は四時間」

④ 迅助が去る。小金井も去る。  
十一月十一日夜、土佐藩白川邸。宿毛がやってくる。そこへ、南国がやってくる。

南国

遅かったな、宿毛。

宿毛

坂本さんと一緒に土佐藩邸へ行ってきたんで。南国さんはいつこちらへ？

南国

俺のことはどうでもいい。話は中岡から聞いた。おまえ、岩倉村へ、新選組を連れてきたそうだな？

宿毛

藩邸からつけられていたようです。恥ずかしながら、全く気づきませんでした。

南国

本当か？　気づかないふりをしていただけじゃないのか？

宿毛 　また私を疑うんですか？  
南国 　（宿毛の胸元から紙を抜き取って）これは何だ。  
宿毛 　新政府綱領八策の書き付けです。坂本さんからいただいたんです。  
南国 　これをどうするつもりだ。  
宿毛 　どうもしません。ただ、みんなに読ませようと思って――  
南国 　嘘をつくな！

南国が抜刀し、宿毛に斬りかかる。宿毛がかわして、抜刀する。斬り合い。南国が宿毛の額を斬る。宿毛が倒れる。

南国 　正直に言え。自分は新選組の密偵だと。  
宿毛 　違う。私は潔白だ。  
南国 　だったら、これは何だ。おまえはこれを新選組に送るつもりだった。そうだな？

そこへ、中岡がやってくる。

中岡 　南国さん、刀を下ろしてください！  
南国 　おまえは口出しするな。  
宿毛 　中岡さん、この人を止めてください。この人は、私が密偵だと勝手に決めつけて――  
南国 　黙れ！

南国が宿毛に斬りかかる。宿毛がかわず。南国が宿毛に斬りかかる。中岡が抜刀して、南国の刀を受ける。

中岡 刀を下ろしてください。隊士同士の私闘は禁じたはずです。

南国 私闘ではない。これは制裁だ。

中岡 私の命令に従わないつもりですか？

南国 隊長のおまえが間抜けだから、俺がかわりに務めを果たしてやっているんだ。

中岡 その必要はありません。隊士の取り締まりは隊長の私がやります。

南国 だったら、そいつを厳しく詮議しろ。そいつは間違はなく、新選組の密偵だ。

中岡 わかりました。約束しますから、刀を下ろしてください。

宿毛 中岡さん、信じてください。私は絶対に密偵じゃない。

中岡 (宿毛の額を見て) 傷が深い。詮議の前に手当てをしましょう。

南国・宿毛・中岡が去る。



十一月十二日朝、新選組屯所。迅助・沖田・小金井がやってくる。迅助が腹を押さえて、ひざまづく。

沖田 大丈夫ですか、立川さん？

迅助 すみません。一晚寝れば、痛みが引くと思ったんですけど。

小金井 峰打ちのせいで、腸が破れたのかもしれない。おまえ、今朝は厠へ行ったか？

迅助 大便に血は混じってなかったか？

小金井 わからない。見なかったんで。

迅助 なぜ見ない。大便はその日の体調を測る物差しだぞ。俺なんか、毎朝途中で

止めて――

沖田 その話は後にしましょう。(迅助に) それで、坂本はあなたを峰打ちにした

だけ、立ち去ったんですね？

迅助 ええ。残念ながら、敵の名前は教えてくれませんでした。沖田さんの方は？

沖田 鳥沢は百万遍にある土佐藩の白川邸へ行きました。

小金井 あそこには、陸援隊の屯所がある。そろそろほとぼりが冷めたと思って、元

沖田 の住み処へ戻ったんでしよう。

小金井 そう思います。おそらく、敵も今頃は白川邸に。

沖田 (沖田に) 密偵からの連絡は？

沖田

沖田

小金井

迅助

迅助

小金井

迅助

小金井

迅助

迅助

小金井

迅助

迅助

小金井

迅助

迅助

小金井

迅助

迅助

小金井

迅助

沖田

今のところ、何も。ですから、今日からは白川邸に張りついて、敵が出てくるのを待ちます。

それにしても、坂本つてのはおかしな男だな。（迅助に）おまえを二度も見逃した。

昨日、坂本さんはこう言ったんだ。「わしと一緒に新政府を作るがじゃ。幕府と薩長が一つになったら、もう誰ちゃあ死なずに済むき」つて。

まさか、うんとは言わなかったらうな？

当たり前だ。すぐに断った。

その方がいい。坂本が言ったことは全部でたらめだ。薩長どもは戦の準備を着々と進めている。土佐藩も陸援隊もだ。やつらは幕府の人間を皆殺しにするつもりなんだ。

坂本さんは違う。

なぜそう言い切れる。

だって、あの人は俺を斬らなかった。俺は本気で斬りかかったのに、峰打ちだけで見逃してくれたんだ。

それでますます坂本のが好きになつたつてわけか。

そうじゃない。俺はただ、自分のしていることがとてもつまらないことのように気がしてきたんだ。俺が敵を斬ろうが、切腹しようが、世の中は何も変わらない。命が一つ、消えるだけだ。だったら、他に何かできることがあるんじゃないかって。

それはただの言い訳だ。おまえは切腹するのが怖くなつたんだ。なぜそうやって頭から決めつけるんだ！（と腹を押さえて、ひざまずく）

ああ、まただ。いきなり大きな声を出すから。

そこへ、土方・松本良順がやってくる。松本は診療箱を持っている。

松本 患者発見！（と迅助に駆け寄り）どうした？ 腹が痛むのか？

松本 良順先生、お久しぶりです。

松本 挨拶は後だ。（迅助に）着物の前を開け。腹を見せてみる。

迅助 もう大丈夫です。昨日、腹を刀で叩かれました。

松本 いいから、見せろと言ってるんだ。（と迅助の着物の前を開いて）おお！

迅助 腹の端から端まで、でかいみみず腫れが。これは刀で叩かれたものだな？  
今、そう言いました。

松本 これだけ強く叩かれたら、腸のどこかが破れている可能性がある。（診療箱から聴診器を取り出して）試しに、中の音を聞いてみよう。一同、静粛に！

（迅助の腹に聴診器を当てて聞く）

小金井 ……どうですか？

松本 グルグルキュー、グルグルキュー。これは、五臓六腑が活発に活動している

音。（迅助に）よかったな。悪いところはない。（診察箱から貝を取り

り出して）この軟膏を毎日塗れ。十日もすれば、元に戻る。（と差し出す）

（受け取って）ありがとうございます。

（松本に）相変わらず、お元気ですね、良順先生は。

松本 俺が病にかかってみる。医者の不養生と笑われる。

松本 それで、今日は何をしに？

松本 土方に呼ばれたんだ。沖田の様子を診てほしいと。沖田発見！

沖田 待ってください。私はもう病人じゃない。こうして普通に動けるし、咳も出

土方 沖田 土方 小金井 沖田 松本 沖田 松本 沖田 松本 沖田 松本 松本 松本 松本 沖田 沖田 沖田 沖田 沖田 沖田

ない。

だからと言って、病が治ったと考えるのは早計だ。

そんなことはわかっています。だから、無理はしないようにしている。

陸援隊のやつらと斬り合いをしたのは、どこのどいつだ。

斬り合いは一度だけです。その後は見張りしかしていません。

朝から晩まで外の風に吹かれて、体にいいわけないだろうが。

うるさい、土方！

なぜ俺だけ怒るんです。

大声を出すと、肺臓に負担がかかる。沖田に大声を出させるな。(沖田に)

おまえも大声を出すな。

すみません。でも、私は本当によくなったんです。

それは俺が判断する。着物の前を開けて、胸を見せてみる。

結構です。俺の診察を断るのか。とすると、土方の懸念は正解だったらしいな。普通に

動けるといふのも、咳が出ないといふのも嘘なんだろう。

そんなことはありません。

だったら、それを証明してみろ。

わかりました。でも、人に見られながらというのはいやです。他の人は席を外してください。

わかりました。行きましょう、土方先生。

馬鹿、俺はいいんだ。

よくありません。土方さんも向こうへ行ってください。

馬鹿野郎！ 良順先生を呼んだのは誰だと思ってるんだ！

松本  
土方  
松本

馬鹿はおまえだ！ 沖田に大声を出させるなど言っただろう！  
しかし……。  
いいから向こうへ行け！ 今すぐにだ！

迅助・土方・小金井が去る。

松本  
沖田  
松本

ここへ来ると、必ず喉が痛くなる。間違いなく、土方のせいだ。  
すみません。あの人は本当に頑固なんです。（と着物の前を開く）  
俺はおまえの方が上だと思いがな。（と聴診器を胸に当てて）ゆっくり息を

沖田  
松本

吸ってみろ。今度は吐いてみる。  
……どうですか？ 私の言った通りでしょう？  
（聴診器を外して）確かに、一月前に比べて、かなりよくなっていることは

沖田  
松本

間違いがない。が、完治はしていない。おまえの肺臓からは、相変わらず雑音が聞こえる。  
どんな音です。  
ゼイゼイ、ビュルビュル。まるで壊れた肺臓が「痛い痛い」と泣いているか

沖田  
松本

のようだ。正直に言え、沖田。咳が出なくなっただけというのは嘘だろう。  
そりゃ、たまには出ますよ。ほんの時たま。  
悪いことは言わない。仕事を辞めて、養生に専念しろ。

松本  
沖田

また一日中寝ていると言うんですか？  
労咳に特効薬はない。よく寝て、栄養のあるものを食うのが一番の薬なんだ。  
それは前にも聞きました。だから、私は半年も我慢した。でも、もうたくさんです。

松本 今、養生しなければ、間違いなく死ぬぞ。  
沖田 私にはわかってるんです。養生したって、同じことだと。だったら、死ぬ前に、自分にできるだけのことがしたい。  
松本 馬鹿野郎！

松本が沖田を殴る。沖田が倒れる。

松本 病人のおまえに何ができる。他の隊士の足手まといになつてることが、なぜわからないんだ。

沖田 足手まとい？

松本 新選組の仕事は斬り合いだ。その時、味方に病人がいてみる。どうしたって気を使う。自分の思い通りに剣が振れなくなる。おまえのせいで誰かが死んだら、どうやって詫びるつもりだ。

沖田 (土下座して) 良順先生、お願いします。あと三日だけ猶予をください。三日経ったら、先生の仰る通り、養生に専念しますから。

松本 本当だな？

沖田 本当です。だから、どうか。

松本 わかった。三日後にもう一度来る。しかし、それまでの間も、けっして無理はするなよ。  
沖田 約束します。

そこへ、土方がやってくる。

土方

どうです。診療は終わりましたか。

沖田

一月前に比べると、かなりよくなったそうです。ねえ、良順先生？

松本

まあな。

沖田

それじゃ、私は仕事に行きます。(松本に) 診察、ありがとうございました。

沖田が去る。

土方

(松本に) で、本当のところはどうだったんです。

松本

言えない。

土方

え？なぜ？

松本

沖田と約束したからだ。三日後にもう一度来る。その時、全部話す。

土方

それはないでしょう。あなたをここに呼んだのは俺なんですよ。

松本が去る。後を追って、土方が去る。

十一月十三日朝、新選組屯所。三鷹がやってくる。鉄砲を持っている。

三鷹

そこに隠れているのは誰だ。正直に言わないと、命はないぞ。私は新選組勘定方・三鷹銀太夫。薩長どもを百人以上撃ち殺してきた、京都一のガンマンだ。死にたくなかったら、素直に出てこい。なんだ、おまえは新選組一番隊士の小金井兵庫じゃないか。おいおい、そんなに怖がるなよ。私が同僚を撃つと思うか？ おまえだけは別だ。死ね、小金井！（と鉄砲を構えて）バキ  
ユーン！

そこへ、大月がやってくる。拳銃を持っている。

大月

三鷹さん、今のは？

三鷹

鉄砲の練習です。薩長どもがいつ襲ってきても対応できるように、早撃ちの練習をしていました。

大月

私の耳には「死ね、小金井！」と聞こえました。聞き間違いです。私は「死ね、この馬鹿！」と言ったんです。そんなことよ

大月

り、その手に持っているものは何ですか？  
ピストルです。土方先生に頼んで、買ってもらったんです。



三鷹 大月 カッコいいですね。ちょっと触らせてください。(と手を差し出す) どうぞ。(拳銃を渡して) スミス&ウエッソン社のファースト・イツシュー。

三鷹 大月 坂本龍馬が持っているのと同じ型です。

三鷹 大月 ということは、これがあれば、坂本と対等に戦えるということですね？

三鷹 大月 必ずしもそうとは言いませんが、理論的には可能です。この型は五連式

三鷹 大月 なので、一度に五発、撃つことができます。

三鷹 大月 それは凄いです。弾丸はもう装填してあるんですか？

三鷹 大月 ええ。だから、私の方には向けないでくださいよ。

三鷹 大月 わかってますよ。でも、五発続けて撃ったら、さぞかし気持ちがいいでしょうね。(拳銃を構えて) 死ね、死ね、死ね、死ね、小金井！

三鷹 大月 今、最後になんて言いました？

三鷹 大月 「この馬鹿！」ですよ。そう聞こえませんでしたか？

三鷹 大月 ピストルを返してください。(三鷹の手から拳銃を奪い取って) あなたに持

三鷹 大月 たせておくと、危険な気がする。

そこへ、迅助・沖田・小金井がやってくる。

小金井 おはようございます。朝から漫才の稽古ですか？

三鷹 黙れ、小金井。

迅助 大月先生、申し訳ありません。今日の調練も――

大月 いちいち謝らなくても、わかっていますよ。それより、今日は沖田さんに差し

沖田 上げたものがあるんです。(と拳銃を差し出す)

沖田 ピストルですか？

大月  
小金井

大月  
小金井

大月

小金井

大月

三鷹

小金井

大月

沖田

大月

沖田

大月

沖田

大月

大月

いざと言う時、きつと役に立つと思いません。どうか受け取ってください。  
（大月の手から拳銃を取って）へえ、これがピストルか。思ったより小さい  
ですね。こんなもので本当に人が殺せるのかな。

それは当たり所によります。頭か心の臓に当たれば、一発で死にますよ。  
それはそうでしょうけど、果たして当たりますかね？ 俺は鉄砲には詳しく  
ないが、弾丸の命中精度は銃身の長さに比例すると聞きましたよ。

仰る通りです。鉄砲の調練で使っているミニエー銃なら、一町先の敵が撃て  
る。が、このピストルではその半分が限界でしょう。

半分てことは、三十間ですか？ それは信じられませんね。  
（小金井の手から拳銃を取って）試してみますか？

いいですね。小金井さん、ワツカを作ってください。  
あれはもう結構です。今度という今度は、指を飛ばされる。

（沖田に）町中で斬り合いになった時、敵との距離は一間から五間。このピ  
ストルなら、十分に頭を撃ち抜けます。しかも、相手に斬りかかる必要はな  
い。構えて、狙って、撃つ。それだけでいいんです。

それはなかなか便利ですね。  
そうでしょう？（と拳銃を差し出して）さあ、遠慮せずに受け取ってください。

い。  
お気持ちはありますが、私はピストルを撃つたことがない。いざつ  
て時は、使い慣れた刀の方がいい。

使い方なら、私が教えますよ。簡単だから、すぐに覚えられます。  
いや、結構。私はやっぱり刀の方がいい。立川さん、行きましょう。

沖田さん、あなたがかつて、新選組一の剣士だったことは知っています。し

迅助　かし、今は違う。労咳によつて、以前のように刀が振れなくなつた。  
大月　そんなことはありません。この前だつて、土方先生と試合して、勝ちました。  
迅助　でも、八日前は？　坂本を取り逃がしましたよね？  
大月　あの時は、敵が六人もいたんです。  
迅助　六人ぐらいなんです。元氣だった頃の沖田さんなら、一瞬で倒せたんじゃないですか？

迅助　それは確かにそうですが。

大月　（沖田に）今のあなたは病人なんだ。潔く認めたらどうです。

沖田　わかりました。私の腕が落ちたかどうか、その目で確かめてください。

大月　どうやって？

沖田　勝負しましょう。あなたと私で。ピストルと刀で。

三鷹　馬鹿なことを言わないでください。そんなことをしたら、どちらかが死ぬ。

沖田　命までは取りませんよ。（大月に）さあ、準備はいいですか？

三鷹　大月先生、沖田さんに謝ってください。言葉が過ぎたと。

大月　私だつて武士です。勝負を挑まれて、逃げるわけには行きません。

沖田と大月が向かい合つて立つ。沖田が刀の柄に手をかける。大月が拳銃を構える。沖田が刀の「こうがい」を投げる。大月が避ける。沖田が大月に駆け寄り、大月が沖田に拳銃を向けて、撃つ。銃声。沖田が避けて、大月の拳銃を刀で撃つ。大月がよろめく。沖田が大月の腕を峰打ちする。大月がひざまずく。沖田が刀を振りかぶる。

大月　参つた。  
三鷹　（沖田に）今のは刀の「こうがい」ですか？　そんなものを投げるなんて、

小金井  
三鷹  
大月

反則じゃないですか。  
宮本武蔵は小刀を使って、二刀流で戦いましたよ。  
（大月に）腕が真っ赤に腫れています。すぐに手当てをしましょう。  
（沖田に）病人とは思えない動きでした。無礼な口をきいたこと、お詫びします。（と頭を下げる）

三鷹・大月が去る。小金井が「こうがい」を拾って、沖田に差し出す。

小金井

やっぱり、沖田さんは凄いですね。心配した俺が馬鹿でした。

沖田

（胸を押さえて、ひざまずく）

迅助

どうしたんですか？ 胸が苦しいんですか？

沖田

急に動いたら、息が切れしました。大月さんの言う通り、以前の私なら、どう

小金井

ってことないのに。  
しかし、見事な戦いっぷりでしたよ。おかげで、大月の鼻はポツキリ折れた。  
ざまあみろです。

迅助

（沖田に）出発は、少し休んでからにしますか？

沖田

いや、もう大丈夫。（と小金井の手から「こうがい」を取って）心配をかけ

迅助

でも、まだ顔色がよくないですよ。

沖田

私は本当に駄目な男ですね。あなたの足を引っ張ってばかりいる。

迅助

そんなことはありませんよ。

沖田

いいえ。そもそも、あなたが背中を斬られたのも、私が斬り合いの最中に咳

迅助

込んだからです。あなたには本当に申し訳ないと思っと思っています。でも、私は

あのまま死ぬのが、どうしてもいやだった。布団の上で、何もせずに死ぬのが。何か一つでいいから、新選組の役に立ちたかったんです。

小金井 沖田さん、一つ聞いてもいいですか？

沖田 何ですか？

沖田 勝負、自分が負ける可能性は考えなかったんですか？ 負けたら死ぬかもしれないとは。

沖田 考えませんでした。少しも。

沖田 でも、もし死んでいたら、それは無駄死にですよ？ だって、新選組の役に立たずに死ぬんだから。

沖田 立川さん、今、目の前で家が燃えていて、中に子供が取り残されているとしたら、あなたは助けに行きますか？

沖田 行きますよ。当たり前じゃないですか。

沖田 今、自分がしなければいけないことをする。それが武士だと私は思います。

沖田 さっきの勝負も、私にとっては子供を助けるのと同じだった。

沖田 それで死んでも悔いはないってことですか。俺にはとてもじゃないけど、真似できないな。おまえはどうだ、迅助？

沖田 俺も自信がない。

沖田 そうかな。私はお二人とも、立派な武士だと思いますよ。どうやら胸の痛みも収まったようです。行きましょう、立川さん。

小金井

迅助

沖田

迅助・沖田・小金井が去る。

十一月十三日夜、土佐藩白川邸。坂本・中岡がやってくる。

中岡 夕飯は食ったか？

まだなら、用意させるが。

坂本 いや、かまなかまん。いんまさつき、薩摩藩邸で食わせてもろうた。

中岡 また西郷に会いに行ったのか。あんたって人は、本当にしつこい人だな。

坂本 交渉事つちゆうがは、こっちの熱意を見せることが肝心なんじゃ。

中岡 しかし、毎日押しかけたら、西郷だって迷惑だろう。

坂本 そればあなことはわかっちゃゆう。やき、新政府の話はせんかった。帰り際に

中岡 「例の件、よろしゆう」と一言言うただけじゃ。

坂本 それで、西郷はなんて答えた。

中岡 「検討中でごわす」。

坂本 それだけか？

中岡 昨日まではただうなずくだけじゃった。一言しゃべっただけでも大きな進歩

坂本 じゃ。新政府ができるかどうかは西郷にかかっちゃう。何が何でも、うんと

中岡 言わせてみせるぜよ。

そこへ、鳥沢がやってくる。

鳥岡 中岡 鳥沢 坂本 鳥沢 坂本 鳥岡 中岡 鳥沢 坂本 鳥岡 中岡 鳥沢 坂本

坂本さん、来てたんですか。夕飯、まだなら、用意させますが。ここへ来る前に済ませてきたそうです。

例の件、坂本さんには確認しましたか？

いや、まだです。

何の話じゃ。

宿毛の件ですよ。あいつに密偵の疑いがかかっていることは、坂本さんもご

存じですよ？

おいおい、その話もう終わったがじゃないか？

私もそう思ってたんですが、一昨日、宿毛が岩倉村へ行った時、新選組につ

けられていたそうなんです？ おかげで、坂本さんと中岡さんは危うく斬られ

そうになった。

それは違う。斬られそうになったがは向こうの方じゃ。

しかし、宿毛さんが新選組を連れてきたのは事実だ。

(坂本に)さらにその夜、宿毛は一枚の書き付けを所持していた。そこには、

坂本さんの新政府綱領八策が書かれていました。宿毛は、坂本さんからもら

ったと言いつ張っています、それは事実ですか？

どっちでもかまんならう、そんなことは。

それじゃ、やつぱり嘘なんですか？ 南国さんの言う通り、宿毛はあの書き

付けを新選組に送るつもりだったんだ。

宿毛は今、どこにおる。まさか、殺したがか？

一昨日の夜から、納屋に閉じ込めてある。密偵の疑いが晴れるまでの処置だ。

おまんというやつはまた馬鹿なことを。(鳥沢に)宿毛をここに連れてこい。

今すぐじゃ。

鳥沢 中岡さん。  
中岡 坂本さんの言う通りにしてください。

鳥沢が去る。

坂本 宿毛のような小心者に密偵はつとまらん。そのことはおまんにもようわかっ

中岡 ちよつたらうが。

坂本 他に方法がなかったんだ。

中岡 南国に押し切られたがか。

坂本 違う。南国さんは宿毛さんを密偵だと決めつけて、斬ろうとした。宿毛さん

中岡 を守るためには、二人を引き離れた方がいいと思つたんだ。

坂本 南国は血の気が多すぎる。放つちよいたら、陸援隊のためにならんぞ。

中岡 言われなくてもわかつてる。陸援隊は私の隊だ。

そこへ、南国・安芸がやってくる。

安芸 坂本殿、夕餉がお済みでなかったら、用意させますが。

坂本 どういてみんな、わしの顔を見ると、飯を食わせようとするがじゃ。

安芸 腹が減つては戦ができぬと言いますからな。幕府との戦はもう目の前に迫つ

安芸 ている。食える時に食つておかないと。

坂本 安芸さん、おまん、新政府綱領八策は読んだかよ。

安芸 いや、まだですが。

坂本 宿毛から見せられんかったか？ 一昨日、書き付けを渡したんじゃが。



安芸 あの書き付けは、坂本殿が書かれたのですか？  
坂本 ああ、宿毛が読みたいて言うき、その場で書いて渡した。おまんらにも読ませる言いよったんじゃが。  
南国 (懐から紙を出して) おまえが言っているのは、これのことか。  
坂本 (受け取って) そうじゃそうじゃ。安芸さん、おまんは戦が目の前に迫つちよる言うがのう。わしは新政府さえできれば、戦はせずに済むと思うがじや。ちくとこれを見てくれんか。(と紙を渡す)

そこへ、宿毛・鳥沢がやってくる。宿毛が座り込む。

鳥沢 連れてきました。  
南国 なぜここに連れてきた。坂本の命令か。  
中岡 私が命じたんです。坂本さんが来たので、改めて詮議しよう。  
坂本 (宿毛に歩み寄って) その怪我はどうしたがじゃ。  
宿毛 南国さんと斬り合いになって。大したことはありません。  
坂本 (安芸に) その書き付けは、わしが書いた。これで、宿毛の疑いは晴れたろう？  
南国 (安芸の手から書き付けを取って) 中岡、ここに書いてある字は、坂本のものか。(と差し出す)  
中岡 (書き付けを見て) 違います。坂本さんの字はもつと汚くて、読みにくい。いつもはな。けんど、それを書いた時は、心を込めて書いたがじゃ。  
坂本 そんな嘘が通用すると思うのか？  
南国 (笑って) バレてしもうたら仕方ない。確かに、これを書いたがは宿毛さん



坂本 慶喜公は大政を奉還した。將軍職も返上した。それやに、なんで倒す必要がある。

中岡 今までと何も変わらないからだ。江戸、京都、大坂、堺、博多は直轄領のまま。函館、横浜、兵庫、長崎などの港もそうだ。徳川家の石高は八百万石。慶喜は今でもこの国の王なのだ。

南国 (坂本に) 慶喜の首を取らない限り、この国は変わらない。こんなものはただの夢物語に過ぎんだ。(と紙を捨てる)

坂本 そうか。みんな、そんなふうに思うちよったがか。(と紙を拾って) けんどのう、薩長同盟も大政奉還も、みんな最初は夢物語と言いよったぜよ。

南国 目を覚ませ、坂本。

坂本 お断りじゃ。夢を見て、何が人間じゃ。わしは帰る。宿毛さんも連れていくが、かまなかよ。

中岡 宿毛さんは陸援隊の人間だ。勝手な真似はやめてもらおう。

坂本 おかしいにやあ。さっきまでは、新選組の密偵じゃと言いよったのに。宿毛さん、助けられんがって、すまん。

坂本が去る。

南国 中岡、坂本はもう駄目だ。縁を切れ。

中岡 そう言わないでください。今の日本にあれば、すぐに自分の誤りに気づくでしょう。戦が始まれば、すぐに自分の誤りに気づくでしょう。

安芸 どちらへ？

中岡 坂本さんを追いかけます。一人で帰すのは危険なんで。

中岡が去る。反対側へ、南国・安芸・宿毛・鳥沢が去る。

①十一月十四日昼、新選組屯所。土方がやってくる。日誌を開く。

土方

(読む)「十一月十三日、迅助と沖田が切腹を命じられて、八日が過ぎた。敵は土佐藩の白川邸に潜伏しているものと思われたが、外に出る気配は全くなかった。これでは手の出しようがない。夕方、土方に期限の延長を訴えたが、『ふざけるな』と一蹴された。この男の頭は岩よりも固い。今夜あたり、鉄瓶で頭をかち割ってやろうか」

そこへ、三鷹がやってくる。

三鷹

いかげすが、土方先生？

土方

小金井のやつ、俺の前ではしおらしくしてるが、日誌の中では言いたい放題だな。

三鷹

こんなことを許しておいていいのですか？

土方

しかし、これはあいつの私物だ。何を書こうが、あいつの勝手だ。何を呑気なことを。あいつは土方先生のお命を狙っているんですよ。(読む)

土方

「今夜あたり、鉄瓶で頭をかち割ってやろうか」。しかし、昨夜はかち割りに来なかったぞ。

三鷹 油断してはいけません。あいつは、廁の糞壺に突き落とすとか、熱湯風呂に入れるとか、様々な計画を練っています。今すぐ手を打たないと、この世とオサラバすることにになりますよ。

土方 俺は時々、おまえとオサラバしたくなるよ。

そこへ、迅助・沖田がやってくる。

三鷹 あれ？ 沖田さん、これからお出かけですか？

土方 (沖田に) 昼過ぎに出かけるとは大した余裕だな。

沖田 そういうわけじゃないんですが、昨夜からちよつと風邪気味で、熱があつて。

土方 本当に風邪か？ 労咳がぶり返したんじゃないのか？

沖田 違いますよ。良順先生にいただいた風邪薬を飲んだら、熱はすっかり下がりました。

三鷹 無理をしないで、寝ていた方がいいんじゃないですか？

迅助 俺もそう思ったんですが、切腹の期限まで、あと一日しかないし。

三鷹 土方先生、沖田さんのかわりにお願いします。期限を延長してください。と

馬鹿を言うな。一年。

土方 馬鹿を言うな。一度決めたことは死んでも守る。それが新選組のやり方だ。

そうだな、総司？

沖田 言われなくても、わかってます。

そこへ、小金井がやってくる。

小金井

迅助

小金井

三鷹

土方

三鷹

土方

小金井

迅助

迅助・沖田が去る。

迅助、おまえに手紙だ。(と手紙を差し出す)

(受け取って)手紙? 誰から?

差出人の名前はない。持ってきたのは、七つぐらいの女の子だった。

ひよっとして、付け文じゃありませんか? 立川さんも隅に置けませんね。

しかし、相手はまだ子供だろう。

わかかってませんね。その子はきつと、お姉さんに手紙の配達を頼まれたんで

すよ。そのお姉さんというのは、漬け物屋の娘で、歳は十七。色黒で、顔も

体も角張っていて、見た目は漬け物石そっくりなんです。その漬け物石が、

立川さんの走る姿を見て、一目惚れした。ああ、私もあの人の背中に担がれ

て、風のように走りたい。

それぐらいにしておけ。本気で斬りたくなってきた。

(迅助に)で、本当の差出人は誰だったんだ。

叔父上だ。俺にちよつと用があるみたいで、診療所へ来てくれって。沖田さ

ん、行きましよう。

何が叔父上だ。下手くそな嘘をつきやがって。

まさか、本当に付け文だったんですかね? あ、それは俺の日誌じゃないで

すか。土方先生、読んだんですか?

人に読まれたくなかったら、しつかり仕舞っておけ。それから、俺の頭をか

ち割るなら、鉄瓶じゃなくて、鉈を用意しろ。(と日誌を差し出す)

(受け取って)三鷹さん、またあなたが盗んだんですね?

小金井

三鷹 違いますよ。厠の前に落ちてたんです。

土方・三鷹が去る。

小金井

（読む）「十一月十四日、迅助は差出人の名前のない手紙を受け取った。そこには、『昼七つ、下鴨神社にて待つ。龍（りゅう）』とだけ書いてあった。龍（りゅう）は龍馬の龍（りょう）。そう、迅助は考えた」

②堀川通り。迅助・沖田がやってくる。迅助が沖田に手紙を渡す。

迅助

どうせまた、仲間になれって話ですよ。沖田さんは先に白川邸へ行っていてください。

沖田

何を言うんです。私も一緒に行きますよ。

迅助

心配はいりません。坂本さんは俺を罫に嵌めるような人じゃない。

沖田

わかってますよ。でも、念のためです。

迅助・沖田が去る。

小金井

（読む）「迅助と沖田は不動堂村の屯所から下鴨神社へ向かって歩き出した。不動堂村は京都の南の端、下鴨神社は北の端。早足で歩いたのに、三時間もかかった」

小金井が去る。



③ 下鴨神社。 迅助・沖田がやってくる。 反対側から、南国がやってくる。

南国 遅かったな、立川迅助。 一緒に来たのは、沖田総司か。

迅助 なぜあんたがここに？

南国 おまえがその手に持っている手紙、その手紙を書いたのは俺だからだ。

迅助 そうか。俺はまんまと誘き出されたというわけか。

南国 おまえは以前、坂本の命を助けたらしいな。新選組の隊士のくせに、なぜ坂

南国 本に味方する。

迅助 あの時は、坂本さんだとは知らなかった。知っていたら、捕まえていた。

南国 それなら、なぜここへ来た。

迅助 もちろん、捕まえるためだ。坂本さんは奉行所の役人を殺した、重罪人だ。

南国 それを聞いて、安心した。おまえを呼んで、正解だった。

迅助 俺もあんたに会えてよかった。九日前の借りを返させてもらおう。(と刀の柄

迅助 に手をかける)

南国 まあ、待て。刀を抜くのは、俺の話聞いてからにしろ。

迅助 弁解は無用だ。(と抜刀して) 沖田さん、ここは俺に任せてください。

沖田 いいでしょう。でも、くれぐれも気をつけて。

迅助 心配いりません。俺の剣の師匠は沖田総司ですから。(南国に) 行くぞ。

迅助が南国に斬りかかる。沖田が「立川さん！」と叫んで、迅助を突き飛ばす。銃声。

沖田が右手を押さえて、ひざまずく。そこへ、安芸・宿毛・鳥沢がやってくる。安芸は鉄砲を持っている。迅助が沖田に駆け寄る。



南国 いや、ここからが本題だ。立川迅助、おまえが探している坂本龍馬は、河原

町の醤油屋・近江屋の二階にいる。そこが今の坂本の隠れ家だ。

敵の俺に、なぜ教える。

おまえに坂本を始末してもらいたいからだ。

始末？ 斬れと言うのか？

南国 坂本は俺たち陸援隊にとつて、邪魔な存在になった。が、俺たちの手で斬る

わけには行かない。坂本は土佐はもちろん、薩長にとつても重要な人物だからな。俺たちの仕業だということが露顕したら、間違いなく殺される。

だから、俺がやれと？

南国 おまえはさっきこう言ったな？ ここへ来たのは坂本を捕まえるためだと。

だったら、今から近江屋へ行け。そこに坂本がいる。

俺には先にやらなければならぬ仕事がある。(と南国に刀を向ける)

この男が死んでもいいのか？

迅助

安芸

安芸が沖田の頭に鉄砲を向ける。鳥沢が沖田に歩み寄り、刀に手をかける。沖田が鳥沢

の手を捻り上げる。安芸が鉄砲を空に向けて撃つ。

安芸

おとなしくしろ。

鳥沢が沖田の刀を奪い取る。

迅助

安芸

何をやる。

わからんのか。この男は人質だ。貴公が坂本を斬って、戻ってきたら、無事

迅助

南国

迅助

南国

沖田

迅助

沖田

迅助

南国

鳥沢

南国

迅助・鳥沢が去る。

に解放する。

（南国に）わかった。あんたの言う通りにする。そのかわり、沖田さんも一緒に  
緒に行かせてくれ。俺一人じゃ、坂本さんには勝てない。

だったら、屯所へ行って、援軍を頼め。近江屋には、坂本の連れもいる。だ  
から、最低でも二十人は連れていった方がいい。二十人で二人を仕留めるん  
だ。

しかし……。

今から一時間だけ時間をやる。暮六つの鐘が鳴るまでに、ここへ戻ってこい。  
少しでも遅れたら、沖田の命はない。そうそう、土産に、坂本のピストルを

持つてこい。ピストルと沖田を交換してやる。  
立川さん、私のことは気にしないでください。

どういう意味です。  
あなたは坂本を斬りたくないんでしょう？ だったら、その男に従うことは  
ない。

しかし、沖田さんを見殺しにするわけには行きませんか。  
どうする、立川。やるのか、やらないのか。

やる。俺は坂本さんを斬る。

よく言った。それでこそ、新選組の隊士だ。  
俺もこいつに付いていきます。見張り役が必要でしょう。

よし、頼む。妙な真似をしたら、すぐに斬って構わん。  
承知しました。（宿毛に沖田の刀を渡して、迅助に）行くぞ。

宿毛  
南国  
安芸  
沖田  
南国

南国さん、あなたは中岡さんまで殺すつもりですか。  
あの男は、隊長を務めるには性格が軟弱すぎる。そうは思わないか？  
しかし、ここから近江屋まで三里はある。はたして暮六つまでに戻ってこられるかどうか。  
ご心配なく。立川さんは必ず戻ってきます。  
どっちでもいい。たとえ立川が失敗しても、俺たちが失うものは何もないのだ。

沖田・南国・安芸・宿毛が去る。

① 小金井がやってくる。日記を開く。

小金井

（読む）「迅助は下鴨神社を出て、河原町通りを南へ向かった。すぐ後ろから、鳥沢がついてきた。今出川通りとの十字路を過ぎると、鳥沢が後ろから呼び止めた」

十一月十四日夕、河原町通り。迅助・鳥沢がやってくる。

鳥沢

待てよ、立川さん。なぜ右へ曲がらなかった。屯所へは行かないのか？

迅助

ああ。

鳥沢

まさか、一人で近江屋に乗り込むつもりか？ あんた一人で坂本さんに勝てると思ってるのか？

迅助

さあな。

鳥沢

坂本さんは北辰一刀流の免許皆伝だ。その上、ピストルまで持ってる。南国

迅助

さんの言う通り、屯所へ行って、援軍を頼むんだ。

鳥沢

あんたの指図は受けない。

迅助

馬鹿。俺はあんたのことを心配して、言ってるんだ。新選組の仲間として。

迅助

何だって？

鳥沢

坂本が酔屋に潜伏していることを報せたのは俺だ。その後、連絡しなかったのは、次の隠れ家がわからなかったからだ。坂本も酔屋の一件で懲りたのか、俺たちには秘密にしていた。南国だけは知っていたが、どんなに水を向けても、口を滑らせなかった。そこで、この計画を思いついたってわけだ。

迅助  
鳥沢

それじゃ、俺に坂本さんを始末させようとしたのは――  
まさか、沖田さんまで来るとは思わなかった。鉄砲で撃たれた時はヒヤッとしたよ。しかし、結局は俺の狙い通りになった。坂本の居場所がわかったんだ。後は援軍を引き連れて、近江屋を襲うだけだ。

迅助  
鳥沢

そんなことをしたら、斬り合いになる。またたくさんの人間が死ぬ。そのかわり、坂本の首が手に入る。あいつは勤皇派の大物だ。池田屋以来の大手柄になるぞ。

迅助

駄目だ。俺は屯所へは行かない。

鳥沢

おいおい、何を言い出すんだ。

迅助  
鳥沢

俺のせいでも、人を死なせるわけには行かない。死ぬのは俺一人でたくさんだ。下らないことを言うな。坂本を斬らなければ、沖田さんの命はないんだぞ。

迅助

(迅助の腕をつかむ)

鳥沢

放せ。(鳥沢の手を払う)

迅助  
鳥沢

わかったぞ。あんたは手柄を独り占めにするつもりなんだな？  
何が手柄だ。俺は今しなければならぬことをするだけだ。

迅助が走り出す。鳥沢が去る。小金井が日記を開く。

小金井

(読む)「迅助は近江屋へ向かって走り出した。今出川通りとの十字路から

近江屋までは、河原町通りを真つ直ぐ南へ走るだけ。走行距離はおよそ九千三百メートル。所要時間はなんと二十三分」

小金井が去る。  
② 近江屋の二階。坂本・中岡がやってくる。

中岡 誰が訪ねてきたのかと思つたら、またあんたか。  
坂本 そう言うな。わしはこいつが来るがを、首を長ごうして、待つちよつたがじや。

中岡 (迅助に) しかし、坂本さんがここにいて、よくわかつたな。宿毛さんの耳には入れないようしておいたんだが。

迅助 あの人は新選組の密偵じゃありません。私は南国さんに聞いたんです。

中岡 南国さんに？ あんた、いつあの人に会つたんだ。

迅助 ついさつきです。

坂本 そんなことはどうでもええ。おまんがここに來たつちゆうことは、わしの仲間になることにしたがかえ？

迅助 違います。(と抜刀する)

坂本 おいおい、それは何の真似じゃ。

迅助 南国さんと約束したんです。あなたを斬ると。

坂本 わからんのう。新選組のおまんが、なんで南国の命令に従う。

迅助 交換条件ですよ。あなたを斬るかわりに、沖田さんの命を助けてもらう。

中岡 どういうことだ。沖田は南国さんに捕まったのか？

迅助 その通りです。あなたたちを斬つて、暮六つまでに戻らないと、沖田さんは



坂本 殺される。  
いかにも南国がやりそうなことじゃのう。人をつこうて、わしの命を狙うとは。

中岡 (迅助に) しかし、それなら、なぜ一人で来た。援軍を連れてこようとは思わなかったのか。

迅助 そんなことをしたら、去年の一月と同じことになる。

坂本 去年の一月？ わしが奉行所の役人に襲われた時のことか。

迅助 斬り合いになって、たくさんの人が死んだ。俺は俺のせいで、人を死なせたくない。

坂本 それやに、わしの命は奪うが。

迅助 あなたは奉行所の役人を殺した重罪人だ。

坂本 じゃから、殺してもいいというわけか。

迅助 いいとは思いません。しかし、沖田さんの命を助けるには、斬るしかない。

迅助が坂本に斬りかかる。坂本がかわして、迅助を殴る。迅助が倒れる。坂本が抜刀して、刀を迅助に向ける。

中岡 待て、坂本さん。

坂本 止めるな、中岡。わしにはこいつが許せんがじゃ。(迅助に) この前、わし

中岡 は何と云うた。新選組の立川はたった今、死んだ。おまんは今から別の人生を生きるがじゃ。そう云うたろう？ それやのに、またしても同じことを。

坂本 坂本さん、それは違うぞ。

中岡 止めるな、云うんがわからんが。

中岡　いいから、俺の話の話を聞け。立川は嘘をついている。ここへ一人で来たのは、あんたを斬るためじゃない。斬られるためだ。

坂本　斬られる？　わしにか？

中岡　立川はあんたを死なせたくなかった。だから、援軍を連れてこなかったんだ。

（迅助に）そうだろう。

坂本　けんど、立川が死んだら、沖田はどうなる。

中岡　あんたが助けてくれると思っただ。だから、南国さんの人質になっていると言ったんだ。

坂本　わしには信じられん。自分の命を捨ててまで、どういてわしを助けようとする。どういてながじゃ、立川。

迅助　あなたは今の日本にとって、大切な人だ。絶対に死んじゃいけない。べこのかあ。それが新選組の隊士の言うセリフか。

③新選組屯所。大月・鳥沢がやってくる。迅助・中岡・坂本は去る。

大月　土方先生！　土方先生！

反対側から、土方・三鷹がやってくる。

三鷹　どうしたんですか、大月先生？　そんなに大きな声を出して。

大月　今、門を出ようとしたら、この人が走ってきて。

鳥沢　私は土方先生にお話があります。

土方　俺はここだ。話したのは何だ。

鳥沢 私は監察方の村山謙吉と申します。六月より、鳥沢鍬平という名前で、陸援隊に潜入しておりました。

土方 おまえが村山か。名前だけは山崎から聞いている。

三鷹 (鳥沢に) ひよつとして、坂本の隠れ家がわかったんですか？

鳥沢 そうです。河原町にある、近江屋という醤油屋の二階です。

土方 よくやった。早速、非番の隊士を偵察に行かせよう。

鳥沢 待ってください。実は今、その近江屋に、立川が行ってるんです。

三鷹 立川って、立川迅助さんですか？

土方 (鳥沢に) 一体どういうことだ。詳しく説明しろ。

鳥沢 立川は今から半刻ほど前、陸援隊の南国という男に呼び出されました。場所は下鴨神社。南国は沖田さんを人質に取り、坂本を始末してこいと命じたのです。

三鷹 陸援隊の隊士が、なぜ坂本の命を狙うんです。

大月 それより、立川さんが心配だ。坂本はピストルを持ってる。立川さんに勝てるわけない。

土方 二人とも黙れ！ここで騒いでいても、時間の無駄だ。三鷹、非番の隊士を招集しろ。

そこへ、小金井がやってくる。

小金井 土方先生、ちよつと待ってください。

三鷹 この忙しい時に何の用です。

小金井 村山さんでしたよね？あなたはここへ来る前、迅助と一緒にだったんですか？

鳥沢  
小金井  
鳥沢

ええ、それが何か。  
迅助を一人で近江屋へ行かせたんですか？  
私は必死で止めたんです。しかし、立川は聞く耳を持たなかった。それで私は仕方なく、援軍を呼ぶために――

土方が鳥沢を殴る。鳥沢が倒れる。

土方

なぜ立川の後を追わなかった。立川が死んでもいいと思ったのか。

鳥沢

違います。私一人が行ったところで、立川の助けにはならないと思って。

土方

もういい。三鷹、馬を用意しろ。近江屋へは俺が行く。

小金井

私も行きます。

大月

私も。

三鷹

土方先生、私も行かせてください。

土方

馬鹿。おまえが行っても、足手まといになるだけだ。

三鷹

行かせてください。私だって、立川さんに死んでほしくないんです。

土方

いいだろう。俺についてこい。

土方・三鷹が去る。反対側へ、大月・鳥沢が去る。

④ 迅助が走ってくる。小金井が日誌を開く。

小金井

（読む）「近江屋を飛び出した迅助は、河原町通りを北へ向かって走り出した。太陽は既に西の山影に沈み始めていた。が、暮六つの鐘はまだ聞こえない。下鴨神社に飛び込むと、木々の間に、沖田の姿が見えた。走行距離はお

よそ一万二千メートル。所要時間はなんと三十分ちようど」

下鴨神社。沖田・南国・安芸・宿毛がやってくる。小金井は去る。

沖田 立川さん、無事だったんですね？

南国 (迅助に) 何とか時間に間に合ったな。坂本と中岡は仕留めたのか。

迅助 ああ。

安芸 鳥沢殿はどうした。姿が見えぬが。

迅助 ここを出た時、別れたよ。あの人は新選組の密偵だった。

安芸 鳥沢殿が？ まさか。

迅助 (南国にピストルを差し出して) 坂本さんのピストルだ。これを持ってくれ

南国 ば、沖田さんを解放するって言ったよな？

南国 忘れるものか。ピストルをこっちへよこせ。

迅助が南国にピストルを渡す。南国が迅助にピストルを向ける。

沖田 何をするんです。

南国 こいつは坂本と中岡の仇だ。生かして返すわけには行かぬ。

迅助 俺を殺して、口を封じるつもりか。初めから、そうするつもりだったのか。

南国 ここまでうまく行くとは思わなかったがな。安芸、宿毛、おまえらは沖田を

宿毛 やれ。

安芸 (沖田の前に立って) やめてください。こんなやり方は間違っている。

安芸 貴公は密偵ではないのだから。ならば、沖田を庇うのはやめろ。

宿毛 あなた方には、武士としての誇りはないのですか？  
迅助 あるわけないだろう。南国さん、俺はあんたを軽蔑する。  
南国 上等だ。あの世でせいぜい俺を恨むがいい。

南国がピストルを撃つ。が、不発。

迅助 悪いな。弾丸は抜いておいた。

南国 貴様！

迅助 中岡さんにそうしろって言われたんだ。「南国さんはあんたを撃とうとする

だろう。用心のために、抜いておけ」って。

まさか、坂本と中岡は生きているのか。

(迅助に) ふざけるな！(と鉄砲を向ける)

宿毛 (沖田の刀を捨て、鉄砲をつかみ、地面に向けて) 立川さん、逃げてくださ  
い！

南国が抜刀して、宿毛に斬りかかる。迅助が南国の刀を払う。安芸が鉄砲から手を離し、  
抜刀して、宿毛に斬りかかる。宿毛がかわす。沖田が自分の刀を拾い、抜刀して、安芸  
に斬りかかる。安芸がかわす。宿毛が安芸に鉄砲で殴りかかる。安芸がかわして、宿毛  
の腕を斬る。宿毛が倒れる。迅助・沖田が宿毛に駆け寄る。そこへ、坂本・中岡が走っ  
てくる。

中岡 待て！ 双方、刀を引け！  
坂本 立川、おまん、足が速すぎるぜよ。

中岡 南国さん、話は立川さんから聞きました。まさか、あなたが裏切るとは思わなかった。

南国 裏切ったのではない。これは陸援隊のためにしたことだ。

中岡 坂本さんは私の盟友です。勝手に殺されては困る。

南国 おまえだつて、わかっているはずだ。薩長同盟を締結させた時点で、坂本の

南国 役目は終わったのだ。

中岡 しかし、あなたは私まで殺そうとした。それも陸援隊のためですか。

南国 そうだ。おまえのような軟弱者に、隊長を名乗る資格はない。

中岡 非難は甘んじて受けましょう。しかし、勝手に暗殺を企むのは許さない。

坂本 刀を引け。白川邸へ戻つて、裁きを受けるがじゃ。

南国 断る。

坂本 ならば、力づくで連れていくだけじゃ。来い、南国。(と抜刀する)

迅助 待つてください。そいつを捕まえるのは俺の仕事です。

迅助が南国に斬りかかる。南国がかわして、迅助に斬りかかる。迅助がかわす。坂本が南国に斬りかかる。南国がかわす。一対二の激しい斬り合い。その間に、安芸が鉄砲を拾つて、走り去る。後を追つて、沖田が走り去る。中岡は宿毛の傷の手当てをする。南国が迅助に斬りかかる。迅助が避けて、転ぶ。そこへ、土方・三鷹が走ってくる。

土方 立川、無事か！  
三鷹 助けに来ましたよ、立川さん！

土方・三鷹が南国に斬りかかる。南国がかわして、走り去る。後を追つて、迅助・土方

・三鷹が去る。

安芸が走ってくる。後を追って、沖田が走ってくる。沖田が安芸に斬りかかる。安芸がかわして、沖田に鉄砲を向ける。銃声。安芸が腕を押さえて、ひざまずく。そこへ、鉄砲を持った大月・小金井がやってくる。

小金井 沖田さん、お怪我は？

沖田 危ないところを、助かりました。

大月 どうです？ 鉄砲だって、それなりに役に立つでしょう？

南国が走ってくる。後を追って、迅助・土方・三鷹が走ってくる。

坂本 南国、残っちゅうがはおまん一人じゃ。諦めて、刀を引け。

土方 誰だか知らねえが、横から口出しするな。こいつは総司と立川を罠に嵌めた。

絶対許さねえ。

三鷹 土方先生、この人はひよっとすると、坂本龍馬じゃないですか？

土方 それはどうした。俺は今、忙しいんだ。(南国に) 来い！

迅助 待ってください、土方先生。そいつの相手は私にやらせてください。

土方 なぜだ、立川。

沖田 その人は陸援隊の南国。立川さんの背中を斬った男なんです。

迅助と南国が向かい合う。迅助が南国に斬りかかる。激しい斬り合い。迅助が南国の背中を斬る。坂本が迅助と南国の間に割って入る。



坂本

中岡

土方

中岡

陸援隊隊長・中岡慎太郎です。この度は危ないところを助けていただき、感謝の念に耐えません。恥ずかしながら、この二名は我が隊の隊士。裁きは隊長である私にお任せいただきたい。

土方

坂本

土方

三鷹

土方

小金井

迅助

三鷹

土方

三鷹

土方

土方

土方・三鷹・大月が去る。

そこまでじゃ。ええな、立川？

(土方に) 新選組副長・土方歳三殿とお見受けしましたが。

いかにも。して、貴公は。

陸援隊隊長・中岡慎太郎です。この度は危ないところを助けていただき、感謝の念に耐えません。恥ずかしながら、この二名は我が隊の隊士。裁きは隊長である私にお任せいただきたい。

これ以上の手出しは無用なことか。

すまんのう。後できつう叱つちよくきに、勘弁しちやってくれや。

そういうことなら仕方あるまい。立川、引き揚げるぞ。

待ってください、土方先生。肝心なことを忘れてませんか？

おお、そうだった。立川、総司、おまえらの切腹は免除だ。

本当ですか？ よかったな、迅助！

ああ。

土方先生、私が忘れてませんかと言ったのは、この男のことです。この男は坂本龍馬なんですよ。

馬鹿。奉行所の役人を殺した重罪人が、新選組を助けるわけねえだろうが。しかし――

この件はこれで幕引きだ。屯所へ帰るぞ。

立川さん、私たちも帰りましょう。

坂本さん、ありがとうございました。

立川さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本さん、ありがとうございました。

坂本 迅助 わしの仲間になるがはどういてもいやか。  
申し訳ありません。私には既に仲間がいるんです。土方先生、三鷹さん、大

小金井

俺のことも忘れるなよ。

迅助

(坂本に)でも、あなたに教えられたことは一生忘れません。

坂本

長生きしろよ、立川迅助。

迅助

あなたこそ。(と頭を下げる)

迅助・沖田・小金井が去る。

中岡

何とも気持ちのいい男だな。

坂本

そうじゃろう。わしは一目会った時から、海援隊に入りたいと思うたがじゃ。

中岡

いや、私は陸援隊に入りたい。

南国

ん、立てるかよ？

坂本

白川邸へ戻って、切腹か。

中岡

いや、おまんは死なせん。死ぬがは、陸援隊の隊士として、存分に働いてか

坂本

らじゃ。そうじゃろう、中岡？

中岡

ああ、死ぬのは幕府を倒してからだ。

坂本

待て待て。おまんはまだわしの意見に反対するがか。もういっぺん、新政府

綱領八策をとつくり読んでみいや。

南国・安芸・宿毛・中岡・坂本が去る。

十一月十六日夕、新選組屯所。小金井がやってくる。日誌を開く。

小金井

（読む）「十一月十五日、松本良順先生が来て、沖田を診察した。沖田は昨日の斬り合いの後も平気そうな顔をしていたが、実は再び発熱していたらしい。良順先生は直ちに静養に専念しろと命じた。沖田は素直に従った。三日前の約束を守ったのだ。今度はいつまで寝ていることになるのか。翌日から、迅助は毎朝、沖田の見舞いに行った」

小金井が去る。

沖田の部屋。迅助・沖田がやってくる。

迅助

沖田さん、わざわざ起きなくていいですよ。

迅助

そう言わないで。私は立川さんにちゃんとお礼が言いたいんです。（と座つて）切腹が免除になったのは、立川さんのおかげです。本当にありがとうございます。（と頭を下げる）

沖田

何を言ってるんですか。私は南国さんの畏にまんまと引つかかった。坂本さんや中岡さんが助けてくれなかったら、今頃はあの世へ行っていました。でも、最後は見事に南国を倒したじゃないですか。

迅 沖 迅  
助 田 助

あの時はもう、無我夢中で。  
あなたは本当に強くなった。もう私に教えられることは何もありません。  
それはちよつと褒めすぎですよ。昨日なんか、坂本さんにこつぴどく叱られました。

迅 沖  
助 田

どういうことですか？

俺は坂本さんに斬られるつもりだったんです。俺の命より、あの人の命の方が大切だと思つたから。それなのにあの人は、「理由さえ正しけりや、何をしてもええつちゆう考えは捨てるんじゃ」つて。

沖 迅 沖  
田 助 田

よくそんなことが言えるなあ。自分だつて、奉行所の役人を殺したくせに。それで、二度と殺すまいと思つた

でも、坂本さんは後悔したんでしようね。それで、二度と殺すまいと思つたんでしよう。その気持ちはよくわかります。私もたくさんの人の命を殺めてきましたから。でもね、もし今、土方さんが行けと言つたら、私は行きますよ。それが私の役目ですから。

迅 沖  
助 田

役目？

今、自分がしなければならぬことをする。それがいやなら、武士を辞める

しかなない。立川さんはどうします。武士を辞めますか。辞めません。でも、坂本さんに言われれば、常に忘れずにいようと思ひます。

沖 迅  
田 助

あなたは坂本さんのことが本当に好きなんですか。

沖田さんも一度会つて、わかつたでしょう。本当におもしろい人なんですよ。あの人が考へてる新政府、うまく行けばいいなと思ひます。

そこへ、三鷹・大月がやってくる。

三鷹 立川さん、迎えに来ましたよ。

迅助 私に何か用ですか？

三鷹 惚けるんじゃないありませんよ。土方先生に命じられた仕事は、昨日で終わった。ということは、今日から出られますよね？ 鉄砲の調練。

大月 (迅助に) あなたは十日も休んだんだ。今日はその分をまとめてやってもらいます。

迅助 まとめるって、どうやって？

大月 立ち撃ち、膝撃ち、伏せ撃ちをそれぞれ千回ずつ。終わるまで、食事は抜きです。

三鷹 (迅助に) 数は私が勘定してあげます。なんたって、勘定方ですから。

そこへ、土方がやってくる。

土方 立川、ここにいたのか。

三鷹 立川さんはこれから鉄砲の調練です。ご用でしたら、私がやりますが。

土方 そうじゃない。(迅助に) 今、奉行所の役人が来たんだがな。昨夜、坂本と中岡が斬られたらしい。

沖田 本当ですか？

土方 近江屋の二階にいるところを、何者かに襲われたんだ。坂本は頭を斬られて、即死。中岡は全身数力所を斬られて、重体。しかし、長くはもちそうもないらしい。

沖田 土方

沖田 三鷹

大月 三鷹

沖田 三鷹  
土方 迅助

沖田 三鷹  
土方 迅助

沖田 三鷹  
土方 迅助

沖田 三鷹  
土方 迅助

誰がやったんですか？

わからぬ。下手人は、死体をそのままにして、逃げたんだ。奉行所の役人は、新選組がやったのかと聞いてきた。馬鹿馬鹿しい。新選組だったら、逃げも隠れもしない。

それじゃ、一体誰が？

南国って人じゃないですか？ 昨日だって、二人を殺そうとしたじゃないですか。

しかし、あの人は立川さんに斬られて、捕まりましたよね？

ええ。でも、あの後、すぐに逃げたのかもしれない。

嘘だ。坂本さんが死ぬわけない。

そう言いたい気持ちはわかるが、間違いないらしい。

近江屋へ行ってきます。行って、この目で確かめてきます。

やめろ。新選組は下手人ではないかと疑われている。今、行ったら、土佐のやつらになぶり殺しにされる。

しかし――

諦めろ、立川。

(うづくまって、泣き出す)

薩長同盟、大政奉還、あの人は立派な仕事をたくさんした。自分の人生を全うしました。悔いはないはずですよ。

……

立川さん。

総司、好きなだけ泣かせてやれ。今日だけは。

迅助・沖田・土方・三鷹・大月が去る。

明治十一年十月四日朝、川崎の河川敷。宿毛がやってくる。日誌を開く。

宿毛

(読む)「十一月九日、朝廷から王政復古の大号令が発せられた。慶喜の將軍職辞職が正式に認められ、幕府は廃止。さらに朝廷は慶喜に対し、徳川家のすべての直轄領を差し出すように命令。しかし、慶喜が従うわけがない。戦の足音が近づいている。俺たち新選組は十四日に大坂へ移動。さらに十六日には伏見へ移動し、陣を張った。俺が江戸から京都へ来たのが、元治元年。つまり、京都には四年いたことになる。四年前は楽しかった。池田屋騒動や蛤御門の戦など、何度も恐ろしい目に遭ったが、その度に沖田に助けられた。が、沖田は労咳に倒れ、今も床に伏せている。新選組随一の剣士と言われた男だが、もう二度と刀を振ることはないだろう。そういう俺たちも、慣れない鉄砲を持たされ、戸惑っている。新選組は剣豪揃いだが、鉄砲の訓練はまだ始めたばかり。これで戦に勝てるのか。不安ばかりが募る。そんな中、迅助の明るさは救いだ。坂本が死んだ直後は腑抜けのようだったが、今は伝令役として、京都や大坂を走り回っている。あいつの顔を見てみると、また楽しかった日々が戻ってくるような気がする。明けて、慶應四年一月三日、ついに戦いの火蓋が切られた」



そこへ、小金井がやってくる。

小金井 宿毛さん、ずいぶん早いですね。何時頃、着いたんです。  
宿毛 三十分ほど前です。まだ誰も来ていなかったの、お借りしていた日誌を  
宿毛 読んでいました。

小金井 どこまで読みました？

宿毛 慶應四年の一月です。鳥羽伏見の戦いが始まったところまで。

小金井 あなたはあの時、どこにいたんです。

宿毛 私が所属していた陸援隊は、中岡さんが亡くなった後、土佐藩の軍に吸収さ  
宿毛 たんです。それで、戦が始まると、すぐに伏見へ。

小金井 え？ それじゃ、あなたはあの時、敵の中にいたんですね？

宿毛 死に物狂いで、鉄砲を撃っていました。

小金井 新政府軍の攻撃は凄まじかった。我々は四日に大坂へ退却したんですが、そ  
小金井 の次の日、俺は腹を撃たれて重傷を負ったんです。もしかして、俺の腹を撃  
小金井 ったのは？

宿毛 私じゃないと思いますよ。私は射撃が下手でしたから。でも、もし私だつた  
宿毛 ら、謝ります。

小金井 もしあなただつたら、許します。もう十一年も前の話だし。で、大坂での戦  
小金井 いが終わった後は？

宿毛 土佐軍は東山道鎮撫軍に編入されました。ですので、東山道經由で、江戸へ。

宿毛 それから、東北各地を転戦して、最後は仙台まで行きました。そこで江戸に  
宿毛 呼び戻され、内務省への出仕を命ぜられたのです。

宿毛 よく生き延びましたね。

宿毛

宿毛

宿毛

宿毛

宿毛

宿毛

宿毛

宿毛

宿毛

宿毛  
小金井

宿毛

小金井

宿毛

小金井

そこへ、迅助がやってくる。

迅助  
小金井

宿毛

迅助

宿毛

迅助

宿毛

小金井

そういうあなたこそ。大坂で怪我をした後は、どうなさったんです。回復するのに半年もかかりましてね。結局、戦はそれっきりです。だから、新選組のその後は知らなかった。迅助に会ったのも、十年ぶりだったんです。そうだったんですか。

あいつは土方について、函館五稜郭まで行ったんですよ。最後まで走り続けました。

今でも走り続けてるんじゃないですか？ ベースボールというのは、球を打って、走る競技でしょう。

そうです。あいつはこの前の試合でも、ガンガン走ってました。

兵庫、来てくれたのか。

おまえが来いって言ったんだろ。今日は珍しい人を連れてきたぞ。誰だと思っ。

お久しぶりです、立川さん。

あなたは陸援隊にいた人ですね？ 名前は確か、宿毛さんだ。

そうです。覚えていてくださっただんですね。

私はあなたを追いかけて、京都の町を駆けずり回ったんです。忘れようって、忘れられませんよ。

あの時は本当にありますがとうございました。私がこうして生きていられるのは、あなたのおかげです。（と頭を下げる）

（迅助に）おまえがこの人を助けたおかげで、俺は腹を撃たれたんだ。

宿毛 迅助 宿毛

迅助

宿毛 小  
金井

迅助 宿毛

迅助

小  
金井

宿毛 迅助

宿毛 迅助

宿毛

それは私じゃありません。たぶん。

今日はこのためにわざわざ？

いや、あなたにどうしてもお話ししたいことがあって。坂本さんと中岡さんが殺された事件のことです。お二人を殺した下手人は、私たち陸援隊ではありません。

わかってますよ。会津で戦をしている時、同じ隊に見廻組のやつがいたんです。そいつの話によると、陸援隊には見廻組の密偵も紛れ込んでいた。その密偵が、坂本さんは近江屋にいと報せてきたんだそうです。

それじゃ、下手人は見廻組だったのですか？

そんな話は初めて聞いたぞ。早速、明日の号の記事にしよう。

もういいじゃないか。あれから十一年も経ったんだ。しかし、あの時、坂本さんが死ななければ、戦は起こらなかった。たくさん

の人が死なずに済んだんです。

それはそうかもしれないが、もう過ぎたことです。今さら蒸し返しても、あの世の坂本さんは喜びませんよ。

そうだな。過去をほじくり返すより、未来へ進むべきだ。

しかし、私は今でも思うんです。もし坂本さんが生きていたらと。忘れなければいいんじゃないですか？

何を？

坂本さんという人が生きていたことを。いや、坂本さんだけじゃない。沖田さんや土方さんやたくさんの人たちのおかげで、今、俺たちはここにいる

てことを。そうですよね。

迅助  
宿毛

宿毛さん、俺と一緒にベースボールをやりませんか？  
私がですか？

ベースボールは男と男の戦いですが、誰も死にません。このバットは、敵じやなくて、球を打つんです。そして、打ったら、ベースへ向かって、全速力で走るんです。

宿毛  
迅助

私にできるでしょうか？

宿毛  
迅助

できますよ。二本の足があれば、誰にだって。

宿毛

わかりました。やります。

小金井  
迅助

（迅助に）俺もやる。実はそのために着替えを用意してきたんだ。

小金井  
迅助

なんだ、最初にそう言えよ。

小金井

どうせだったら、死んだやつらともやりたかったな。この空の下で。そう思

迅助

わないか、迅助？

迅助

ああ。この空の下で。みんなで。

迅助が空を見上げる。小金井・宿毛も空を見上げる。迅助の背中、沖田・土方・三鷹・大月・南国・安芸・鳥沢・中岡・坂本も空を見上げている。